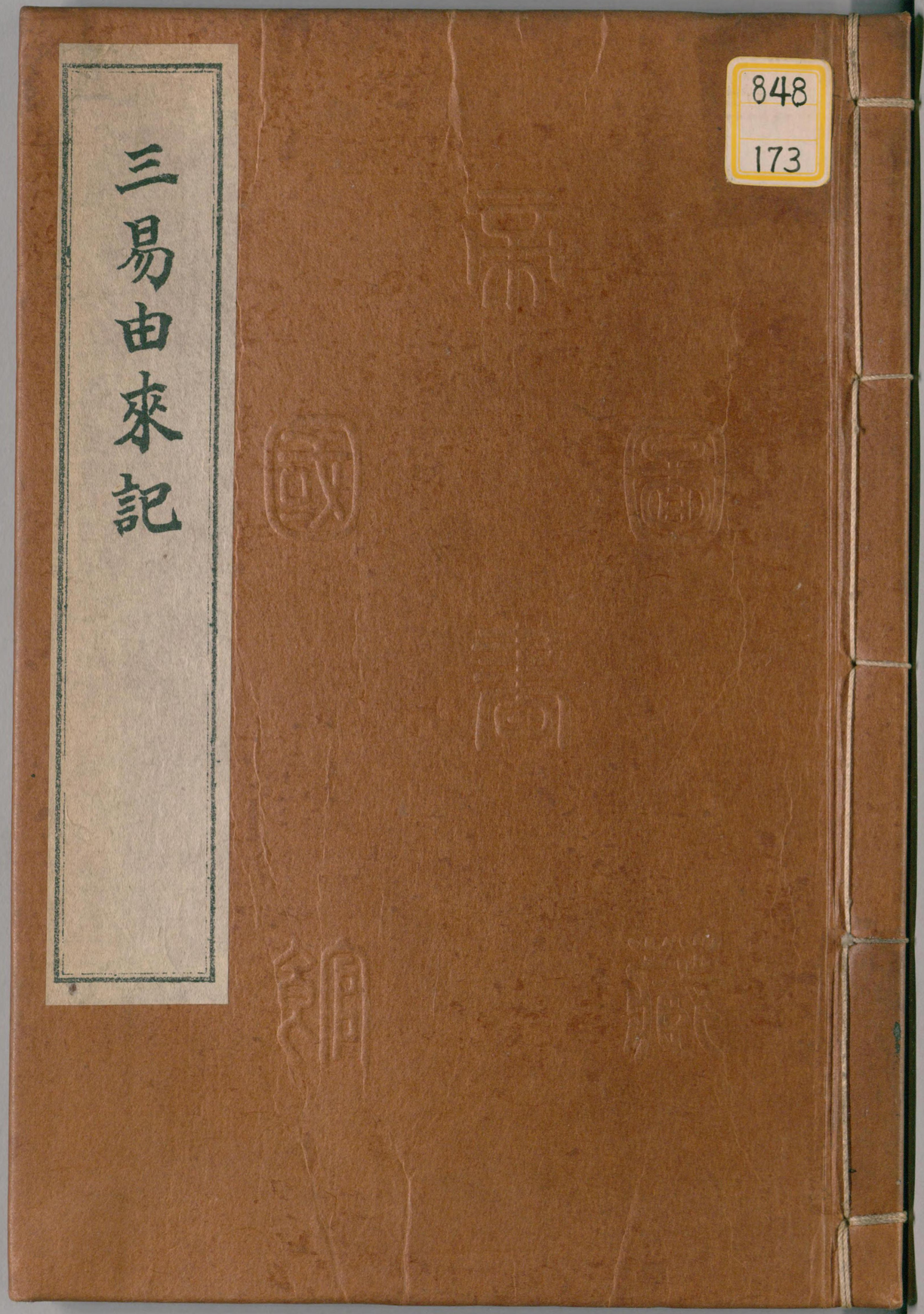


848
173

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』 請求記号 848-173

ガラス使用

三易由来記

848
173

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173

ガラス使用

848
173

三易由来記巻之上

大阪 平岩道拙題
門人 駿河國 新庄道雄
尾張國 望月好尚
竹某遠房 同校

師岡正胤舊蔵本

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

布志の屋所藏

三易由來記卷之上

大壑　平篤胤撰述

門人　駿河國　新庄道雄
　　武藏國　碧川好尚
　　常陸國　竹來道彥　同校

古者庖犧氏之王二天下一也。仰則觀二象於天一。俯則觀二法於地一。觀二鳥獸之文與一レ天地之宜一。近取二諸身一。遠取二諸物一。於是始作二八卦一。以通二神明之德一。以類二萬物之情一。

此第一條也。繫辭傳尓採レ之而出せり。普通の本ホた地之宜と有まど。今た宋せ朱熹が本義了。與地之間。諸本多く有レ天字ヲ云々ヲ依レ之ヲ補ヲ之。庖犧氏ヲ。はく太昊伏羲氏ヲモ称ふ。實尓は我が扶桑本州ノ神眞大国主神ヲ称ふ。彼

國學院大學圖書館藏

國立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173

ガラス使用

赤縣州ヲ渡リ往シテ国ヲ開ク。彼處ヲモ治シ王ヲ為テ。
其蠢民ラヲ始メテ三才ノ道ヲ傳ヘむと。天地萬物の易道
ヲ観察シテ。八卦ヲ作リ授ケ賜ヘる事ヲ。赤縣太古傳及ビ此
記ヲ本編ヲ委曲ヲ説アまだ。今更ヲ云はず。本編とヲ太昊
下ヲモヲ效ふるし。是記ヲ其授ケ遺し賜ヘシ易法の。後ヲ連山
歸藏周易と云ふ三易ヲ為ル由來ヲ論ふ故ヲ。かく名
付ケあり。前ヲテ思ふ旨有リテ易學三千年論と號ジ。ケしうど。再ビ思ふ旨ありテかく改めるあり。ヲ本文
ヲ始作八卦云云ヲ言ヘ陳ヲ河ヲ圖ヲ出シ。洛ヲ書ヲ出
せる其象數ノ則ヲ取リ。う故仰観俯察シテ。ヲ近八ヲ經卦
ヲ作リ。其ヲ八節ヲ合せテ乾坤震巽坎離艮兌ヲ名ヲ命ジ

テ。本命本卦の定則ヲ示シ。八索シテは自然ヲ吉凶ヲ
應あル事。ヲ其別卦六十四ヲ各々其名ヲ命ジテ大象辭
をも定め。ヲ其毎卦ヲ六十四変ヲ索めテ。其時変ヲ譬
ふべき筮法ヲ立ある事はでヲ倉卒シテ心得ガたし。此はみ
ル本編
り委曲せる事ヲ今更ヲ云はず。

二

易之乾坤。足以窮道通意也。八卦
義為之六十四變。周室增以六爻。所以原ニ測ニ淑清之道ヲ而攬ニ萬
物之祖ヲ也。

此第二條ヲ淮南子ヲ要畧ヲ採リ。抑ヲ篇ヲ劉安已ヲ
淮南子二十篇ヲ作リ畢テ後ヲ。其書ヲ著セる用意ヲ。人ヲ

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

若干凡そ博く致し麗を至精に窮め、躰載せば由ら遡るべき自叙あり。然きど其篇首に夫作為書論者所以紀綱道徳経緯人事上考へ之天下接り之地中通諸理錐未能抽引玄妙之中才繁然足以観終始矣總要學究而語不剖判純樸靡散太宗懼人之惛々然弗能知也故多為之辞博為之説又恐人之難本就末也云々を言云を今此本文を出せり著書此用意はさせる如此有べき事ぶさるそ已さも無きど易の三ぶ変転せる次第を論ぜるぶ依れる事ぶり延まる趣の所思え連山帰藏周易の起原は伏羲氏ぶ揆るぶ此訓ぶ効ふ文も相似るも甚奇くおそ。此を易之乾坤を、唯了乾坤とは言ずれど此を父母を云云を震巽坎離艮兌の六子を含畜也流ぶを周禮を謂もる經卦乃ち三爻小成の八卦を云ずを。易の乾鑿度ぶは乾と坤とみ云云を父母六子の八卦を斡たる文も此を。文意は其小成の八卦ぶを三才の道を窮め天下の意を通ぜ陳ぶ足ぶりと。〇八卦可以識吉凶知禍福矣は八卦を此ぶを。周禮ぶ謂也陳別卦乃ち六爻大成の六十四卦を云ずを。六十四卦を直ぶ八卦と称る事は本編ぶ已ぶ委く説と是き。

文意は小成の八卦ぶを適を窮め意を通ぜ足ぶを重卦せる六十四卦を以て吉凶を識て禍福を知る道なも始免し云陳ぬ是を。〇昭而伏羲為之六十四変は高誘註ぶ八を変為六十四卦伏羲示其象と云陳は

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

然る言ありて、彼別卦六十四を以て、吉凶を識、禍福我れも知
るかを足るなり、又その八々六十四の変象
をおしはかりをも示せる由ありて、是謂ゆる変爻法ありて、前件經
卦別卦
件事おも伏羲と云ふ、此おも始めて伏羲と云ふまだ、其經卦
及び別卦も、伏羲の挙ありしやうなれども、如く聞ゆるまでも、淮南子件意
をそら、毎卦六十四変の法も、伏羲氏おも此ていふ云出ある由
以六爻也、高誘注おも周室謂文王也、と云ふは如く、伏羲氏の一
卦六十四変件法有しかも、周文王が心ざまく更おも毎卦一爻
一爻件判断を増始めて、其占ひさまおも立ある由おも、此を委
くも、第五條おも論ふを下件文意を、考ふ次々おも増
益し来れる事も、淑清の道を原測して、萬物件本祖を攄遂

せむ為ぬるとも言ひて、上件夫作為書論者云ふ云へる文を
結び、其子書件凡そ博おも致せる證例と為ある物り、淑も善也
深也、清も澄也、潔也、攄は窮おも同じ、深澄の道
を原測して、萬物の本起を窮むる義ぬり、然もだ八件經
卦の体を更ねて、其を重祐て、六十有四件別卦と為して、各
々その卦名を命じ、はべ、其別卦の、各々六十四變を為ね記
筮法、及び其大象件辞も何も、其原も伏羲氏おも出ある疑
ひ無くれも、おも本編おも論ふる説どもを合
せ考へて、其旨を知り辨ふべし、是を以て晋件
王弼が易註おも、伏羲重卦と云ふ、唐件孔穎達が正義おも、其説
を用ひて、重卦之人、諸儒不同、凡有四説、王輔嗣等以為伏犧
重卦、王輔嗣が王弼あり此を必ず
淮南子件説おも據れる物らも、鄭玄之徒以為神農、此を

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』 請求記号 848-173
ガラス使用

三

庖犧氏沒神農氏作日中爲市致天下之民聚天下之貨交易而退各得其所

此第三條を繫辭傳ホ庖犧氏始メテ八卦ヲ作ル事ヲ云ヘル條ホ接セル殘採ヲ舉ケタルナリ　但シ此ホ用ヰタル文ヲ庖犧氏沒ス

云ヘル沒ヲ出ホ對セル言ホテヲ日沒ス沒ヲ同ジ抑モ太昊庖犧氏ヲ皇国ノ神眞大物主神ホ坐ス事ヲ彼国人ヲ教導セム爲ホ暫シ彼處ヲ出現シテ其ノ功績ヲ皇国ホ歸ヲ給ヒテリ　然ルホ其ヲカヲ方言ホ沒シト云ヘルナリ　言ハ事ト訓ミ心得ルヲ甚ク悟ヲ赤縣太古傳ホ論ヒヲキヲ今更ホ云ハヲ大概ヲ云ヒヲキ　ソヲテ太昊氏ヲ隱沒セルヲ作セルホ非ヲ其間ホ出ケル數氏有ヲヲ無ヲ乞　然ルホ彼ノ國ヲ國柄ヲシテ人情固リ薄惡ナキ故ニ伏羲氏ノ教牙漸々ホ頽レテ猥亂ホカヲ以來シヲ神農氏ヲ伏羲氏ノ彼國ホ生遺セル數子ヲ中ホ步與ト云

ヲト易積算法ノ出ケル説ナリ　次條ホ引クヲ見ルベシ　孫盛以爲レ夏禹ト云ヘル説ナリ　何クヲ詳ニ史遷以爲文王ト史記ヲ云ヘル説ナリ　第五條ホ所見ケル誤ヲ見ベシ　乾鑿度云皇策者犧用著在六爻之後卽伏羲已重卦ヲ此乾鑿度ヲ引用セル　鄭玄注ノ書ホヲ非ヲ云ヘルナリ　此言ノホト第九條ホ見ベシ　今依輔嗣ト言ヲ此説ヲ用ヰタルナリ　王應麟ガ玉海ホ朱震ガ云　論重卦者六家王弼虞翻以伏羲鄭玄以神農孫盛以夏禹楊雄司馬遷以文王孔穎達陸希聲以弼爲是ト有ルモ此意ニ非ヲ

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

ゑしが子ホ玄炎帝ゟも稱ス聖徳の人ホ玉ヒ故ホ祖聖ヒ
遺法ヲ受行ヒ玄種々ホ教導セル事ヲ為セり。其法教導セる事ども及ビ其出自ヒ委
しき考ヲ太古傳ホ註シおく別ホ太古傳ヒ系図ヒ云ふをも著セきで。其書等ホ就テ見るべし。扨テ文面
ヲ如ク都市ヲ為シテ。民ヲ致シ貨ヲ聚めテ。交易ヒ道ヲ始
ゑし事ヲ勿論ナるが。此交易ヒ云ふホ。易法ノ交易ヲ成せ
る義なも無説ある傳へあり。是ヲ以テ司馬貞が補史記ホ。教
又日中ヲ為シ市。交易而退各得其所。遂重八卦ヲ為ス六十四爻ト云
云。羅泌が路史ホ。於是通其變八々成卦。艮以為スヲ始ト所謂連山
易也。故亦曰連山氏ト云ヒ。若ヒ此本文。易説ヲ採ルあルホ
氏ノ八卦ヲ作きる事ヲ載せるヒ非ズ。為テ繫辞傳ホ包犧
の由もれヲ徒事ナり。此條ノ次ホ。黄帝ヒ事ホ出せるホ
ヲ。

変通の事ヲ載せきヲ。易説
ゐるこヒ云ふも更ナリ。然ラざ其易法ヒ交易とハ。何ヲ
る趣ナらむと言ふホ。王應麟が玉海ホ。連山首艮者。八風始
於不周。實居西北之方。七宿之次。是為ス東壁営室。於辰為亥。放テ
律為ス應鍾ト。於時為ス立冬。艮震巽離坤兌乾坎連山之序也ヒ見
え。此ヒ玉海ホ。王洙曰トて出せヒ。決テ古連山易ヒ遺
説あり。其ヒ艮ヲ西北不周山ノ方ホ居ヒと有るホ。太昊
氏の古易ヒ真方位ホて。曽て周易あヲて以来の人ホどの。
思ヒ寄べき事ホ非ざるヲ以て辨ふべし。古方位ホ艮の西
北ホる事ヒ本編ホ委ク注せるヲ視テ察ヲべし。晋ヒ皇甫謐が帝王世紀ホ。夏人因テ
炎帝ヲ而曰連山。連山易。其卦以テ純艮ヲ為ス首。夏以テ十三月ヲ為ス正ト。人
統艮ニ漸正月。故以テ艮ヲ為ス首ト。扨太昊氏の卦順ヒ。
乾坤震巽坎離艮兌あり。然ルヲ神農氏右ヒ如ク。唱ヲ此次

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

算を交錯せる故ぞ．交易とは傳ずけむ．然もと其を唯卦
頌ひ唱ふは．交易せる耳ぞ有き．其卦々々方位を有る
義ぞも非ず．思ひ紛ふる事ぞ多かりき．其も太昊氏の易ぞ．艮ぞ
易ぞも．艮ぞ居西北の方にと有る一ッなりて．正位も西北に維ぐり．連山
と易ざる事ぞ辨ふるし．然るに其ぞ玉海ぞはく．連山乾始於子．
坤始於午に至周易乾坤其體乾坤其用乾坤其變ぞはも此交易せる傳牙ぞ重
乃定ると云るも心得ぬ事ぞ有り．其體
卦の事と思ひ誤りて．彼京房が易積算法ぞ．孔子曰八卦因
平伏羲重神農重ぞ八純．聖理玄微と云はぬ始ぬ．此文も玉海及
ぞ困學紀聞ぞ引ある．鄭玄註ぞ．神農重卦と云ひ．魏志
る．ぬ再引たる．周易は鄭玄註ぞ．神農演之為六十四卦．
ぞ．易博士淳于意が言ぞ．包羲制八卦．
皇甫謐が帝王世紀ぞ．庖犧氏作八卦．炎帝重八卦之數究八

八之體為六十四卦ぞと言ひ．上ぞ引く補史記ぞも．重八卦ぞ
為六十四爻ぞ見えたまと．おらぞも同作ぬ史記索隱此等ぬ諸
ぞも．此説ぬ出せり．
説ぞ孔誤りぬり．其も前本文ぞ挙ある淮南子ぬ文ぞ．伏羲
為之六十四變と云ひ．王弼註ぞ．伏羲重卦と云はぬ正説ぬ
ぬさぬ既ぞ委く論牙る如く．はく玉海ぞ薛氏曰神農氏初
經本包犧八卦．蓋八卦成列而六十四具焉．神農氏因之也と
有るが如し．然るに隋志ぬ五行類ぞ．神農重卦經二卷と云
る目あり．此も決ぬ後人の偽撰まて．神農ぞ
托せる．ぬり．ぬて此易ぞ連山易と稱ふる義も．世紀ぞ．連山易艮
為首艮為山．山上山下．是名連山と云るが如し．然れも神農
氏ぞ．はく連山氏とも称ふも．此易法ぞ立ある故ぬり．是ぞ

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

以て路史亦も良以為首所謂連山易也故亦曰連山氏と云
牙里。鄭玄説亦。連山象山之出雲連々不絶と云に。世紀亦ま
る。雲気出内象山とも云る。共亦非あり。神農氏の號
を。はゝ列山氏とも。厲山氏とも。諸書の所見ある。所
は。連山説轉語あるべし。此も羅泌も左り云へるき。然るを周
禮も註亦。杜子春云。連山宓戲と言云。玉海亦。王洙曰。山海経
云。伏羲氏得河圖。夏后氏因之曰連山と云ふを甚しき非説
なり。殊亦山海経亦も此文なく。かゝる彼書亦有るき説とも
覚えぬ事なる哉や。然れど此説ぉ。路史の自注かも。山海経
云ふとを引あり。最も不審しき事なり。第四條亦注も如
此て夏后氏の世亦。此易法を用云ふ事也。第四條亦注も如
れるが。水經注亦。連山易曰。有崇伯鯀。伏于羽山之野。世紀亦。
連山易曰。禹娶塗山氏之子。名曰攸女。生余れど有ふを。夏世

神農氏没黄帝氏作。通其變使民不倦。神而化之。使民宜之易窮
則変。変則通。通則久。是以自天祐之。吉无不利。黄帝堯舜氏作。
刳木為舟。剡木為楫。舟楫之利。以済不通。致遠以利天下。蓋取諸渙。
服牛乗馬。引重致遠。以利天下。蓋取諸隨。重門撃柝。以待暴客。蓋
取諸豫。断木為杵。掘地為臼。臼杵之利。万民以済。蓋取諸小過。
弦木為弧。剡木為矢。弧矢之利。以威天下。蓋取諸睽。上古穴居而
野処。後聖易之以宮室。上棟下宇。以待風雨。蓋取諸大壮。古之葬者。
厚衣之以薪。葬之中野。不封不樹。喪期无数。後聖易之以棺槨。蓋
取諸大過。上古結縄而治。後世聖人易之以書契。百官以治。万民以
察。蓋取諸夬。是故易者。象也。象也者。像也。彖者。材也。爻也者。效
天下之動者也。是故吉凶生而悔吝著也。是故剛柔者。立本者也。変通
者。趣時者也。吉凶者。貞勝者也。天地之道。貞観者也。日月之道。貞明
者也。天下之動。貞一者也。夫乾。確然示人易矣。夫坤。隤然示人簡矣。
爻象動乎内。吉凶見乎外。功業見乎変。聖人之情見乎辞。天地之
大徳曰生。聖人之大宝曰位。何以守位曰仁。何以聚人曰財。理財正
辞禁民為非曰義。

此傳文の偶了存れる物なり。然して此易法も。周世まで用
云ふを来しぬ。我漢以来も都亦廃らきを。其藝文志もに。隋経
籍志亦も載さ。唐志亦始免を。連山十巻と出せまど。其を
隋世亦。劉炫と云ふ者ぃ偽作して。賞を求めし物なり
と。玉海を始免諸書亦見えあり。其が中亦も委きを胡應麟
藝文志。按班氏六経首周易。凡夏商之易絶不聞。隋牛弘購求
寓内遺書至三十七萬巻。魏玄成等修隋志。晋梁以降亡逸篇
名亡不具載。皆不聞所謂連山者。而至唐始出。可予。北史刘炫
傳。隋文帝図籍。炫因偽造連山及魯史記上之。馬端臨據此
以為炫作。或有然者。蓋炫後事発除名。故隋志不録而其書尚
傳于後。開元中盛集群書。仍入禁中。耳。鄭漁仲謂此書當時不
若則宋世已無可考。今亦未能必其
亦不傳。故二書惟論其大槩。不能致詳。と云ぃ也帰藏今

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

則變々則通々則久是以自天祐之吉无不利

此第四條を繫辭傳の前條に接續せる我採もの、但し本書
及黃帝堯舜氏作と有まど、堯舜、神農氏
字を此に要おれも有知多り、黃帝も少典氏子にて神
農は曾孫榆罔に代まて作まて、同
て、共に少典は子孫りと有て、然
赤縣大古傳及び三五本国考春秋命歷叙攷に委しく云へき
も就て見
るべし、此て文意を事久しき時を經るく我變
化せまた民倦ことを之
此易は變通を尚びて、天は祐る所以ぞと云ふ義にて
其變通せば易法の歸藏易と謂ふ、もは雜卦傳の孔穎達が
必皆相襲故に歸藏名卦之次亦多異於時と云へば意ば
有り、連山易は出來し事も、是に准まて思ふべし、其を黃

帝傳に帝取伏羲氏之卦象法而用之據神農所重六十四卦
之義求其重卦之義乃名所制曰歸藏書也と見え、此にも神
農重卦と
云まはは非說り、路史に於是正坤乾分離坎倚象衍數以成一代之
宜坤以為首所謂歸藏易也故又曰歸藏氏と云、はにて知る
べし、二書共文を引る
も甚く切免て委くは本書に就て見るべし、此易法て坤を首と為
せば事は、帝王世紀に殷人因黃帝曰歸藏歸藏易以純坤為
首坤為地萬物莫不歸而藏於其中殷以十二月為正地統故
以坤為首と見え、禮記は禮運に、孔子曰我欲觀夏道之杞得
夏時焉鄭玄云杞夏后氏之後也得
四時之書也其書存有小正我欲觀殷道之宋得坤
乾焉宋殷人之後也得
書也其書存者有歸藏坤乾之義夏時之等吾以是觀

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

之空見えるあり。おゝ王海尓。王洙云。伏羲重卦。乾上坤下。三ッ天地之位。帰蔵先坤後乾首二万物之母無闔則无闢无静則无動。此帰蔵所以先坤。欤ほゞ有理。おゝ周易の正義を始。帰蔵易は坤を首とせる説也。數ふるに暇あらず。然をを変通と云ふ也。伏羲氏の易尓乾坤と有ば卦順を。坤を地おをを。萬物之母歸藏次と云ふ義なりて。坤乾と変唱し。其餘の卦順なも易あるの由あり。是を以て黄帝氏時亦號を歸藏氏とも称せるおや。路史尓云るが如し。然るを帰ふた。元をの號おを。其帰藏氏時易れる故尓帰藏易と云ふと釈ある説也。本未あやまり。若こは説也如くを。帰藏と云ふ号は何れ謂ず由ありと云ふおも。連山と云ふも。良なる是尓就を思ふ首としるの依まる名れる事もあり。神農氏を列山氏と称ふも。列山と云ふ地尓生まし故也。其を連山易字をのせる故尓連山氏と称しるを連山氏の生まし地ある故尓連山ぞ

も厲山とも列山とも云ふ。朱震云。歸藏初ゝむ尓。其本未を正ずく。依也。周經者。伏羲初画八卦。因而重之者也。其經初乾初兌初離初震初巽初坎初艮初坤。此八卦也。八卦既重交在其中。此卦名ども此事を。引尓次條の来尓云ふ侯をえるべし。周禮疏。今歸藏坤開筮。帝堯降二女。以舜。妃又見節卦云。殷王其国常。毋谷。太平御覽。帰藏云。有白雲。自蒼梧入大梁。昔女媧筮。張雲幕。枚占之曰。吉。昭々九州。日月代極。平均土地。和洽四国。黄神將戰筮於巫咸。明夷曰。昔夏啓啓。棄龍飛以登于天。擊鉤陶占之曰。吉。朱震易叢引歸藏之乾小畜。彖辞有ほ以て。其易書ぬ大元を知ゑ為し。なお種々ぬ書尓引るお出せをど文繁ければ。多くを引出ざは彩り。然れど右ぬ卦名おを。黄

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

帝氏の遺法を免れ、此、文等を後ニ殿、世ニ記せる文也、偶ニ
存れる物ニ斯て此、易法も、周世ニ用ゐし也、其ゟ後
も廃らまて、其、精説も傳はらず、然も連山易
も、後漢世ニ傳はりし事も、桓譚が新論ニ據ニ知られ
る如、其も玉海ニ、桓譚新論、連山、八萬言、帰藏、四千三百言、と
云る文を引き、楊慎が外集ニ、連山藏ニ於蘭臺、帰藏々ニ於
大ト、此、語見ニ於桓譚新論、則後漢時、連山帰藏猶存、不可以ト筮
文志ニ不ニ列其目一而疑之至ニ隋世之連山則偽作ニ来嘗者耳、と云
るが如し、此事も彩ニ次條ニ、然はニ隋世ニ、二書ニ外既ニ亡
失ニ故ニ、其経籍志ニ、連山、帰藏十三巻、晋太尉
荀軍薛貞注と出して、未ニ、帰藏、漢初已亡、案晋中経ニ有之、唯
載ト筮、不似聖人之旨ニ、本卦尚存故、取貫ニ於周易之首ニ以備
殷易之缺と見え、此文ニ本卦尚存と云ふは、加ニ卦初乾
坤云の、卦名ニ存れるまゝ云ふ、類ニ玉海ニ、史記、正義ニ、七録ニ云、帰藏、載ニ卜筮之書、雑事中興書目ニ、晋
太尉荀軍薛貞注、今但存ニ初経、齊母、本著、三篇、文多ニ缺乱ニ、不可
訓釈、崇文目ニ、漢初有ニ帰藏、已ニ非ニ古経、今書三篇不可ニ究ニ、と見
えたり、ゟ〳〵胡應麟が筆叢ニ、帰藏易十三巻、晋大尉荀軍薛
貞、唐司馬膺各ニ有注、按ニ七略ニ無ニ帰藏、晋中経薄始有ニ此ノ
書、隋志因之至ニ宋僅存ニ、初経、齊母本著三篇、鄭漁仲以為其文
質ニ其義古、後学以ニ其不文ニ則疑而棄之、連山所ニ以亡者、要當復
過ニ于此ニ、噫連山夏易也、帰藏商易也、爻辞之文千古叙事ニ宗焉、
商書簡潔而明、粛或有過ニ于周者、孰謂夏殷之文不ニ如ニ聖人々也、隋
志称ニ此書惟載ニ筮ニ不類ニ聖人之言一、蓋ニ唐世固疑ニ其偽一、然ニ
若ニ鄭以晩出為辨則馬端臨之説尽ニ之矣、とも云ニ、然ニ
右件書等ニ、帰藏、漢初已亡、と云ニ、此説等ニ委ゟ、次條ニ
ゟ至ニ總て論ニ、ゟ視るべし、

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

庖羲氏始畫八卦、因而重之、爲六十四卦、及于三代、實爲三易、夏曰連山、殷曰歸藏、周文王作卦辭謂之周易、周公又作爻辭、

此第五條を階書ゟ經籍志ゟ採きり、是なり、先ゟ、前漢の藝文志ゟ、庖戲氏始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情、至于殷周之際、紂在上位、逆天暴物、文王以諸侯順命而行道、天人之占可得而効、於是重易六爻作上下篇、孔氏爲之彖象繫辭文言序卦之屬十篇、故曰易道深矣、人更三聖、世歷三古、ゟ云ふり、此を庖羲氏始めて八卦を畫し、故之を重ねて六十四卦と爲ゟ、夏殷周ゟ三代ゟ及ぶて、分ちて三易と爲ゟる由ゟて、三易の名を、周禮春官ゟ大卜、掌三易之灋、一曰連山、二曰歸藏、三曰周易、其經卦皆八、別皆六十有四云と有ゟ是ゟて、周禮春官ゟ大ト、掌三易之灋、一曰連山、二曰歸藏、三曰周易、其經卦皆八、別皆六十有四云と有ゟ是ゟて、

又、掌三易、以辨九筮之名、と有る注ゟ、鄭司農云、三易、連山、歸藏也、と云へり、杜子春云、連山、黃帝、歸藏、炎帝、周易、伏犧氏始畫八卦、と云ゟて、作易と云ゟ、而ゟ

ゟて易之興也、其當殷之末世、周之盛德、邪と文王ゟ始免て、易と云ゟきゟど、其連山歸藏も易ゟ非ゟ、文ゟ而ゟ三易と云ゟは、周易の名なゟ以て名くゟ也と云へゟ、又、繫辭傳ゟ讀ゟと麗き故ゟり、本編ゟ論ふを視て知るし、其經卦とは、三畫小成の八卦ゟ云ふ、三易ゟも經卦皆八ゟて、別卦も皆六十有四と云ゟた、姬昌ゟ至ゟて、始免て重卦せりと言ふ說ゟ、無證ゟ當ゟさゟ言ふも更ゟり、其ゟ尚書洪範の七稽疑中ゟ、曰貞、曰悔と有ゟ流鄭玄註ゟ內卦曰貞、外卦曰悔ゟ有ゟ、重卦有ゟし古ゟ著明ゟり、鄭玄注ゟ洪範ゟ疏ゟ引ゟる、王肅ゟ再引ゟる、葉氏三易辨云と、三易經卦皆八、其別皆六十四、經ゟ者其常、別者其變也、其ゟ六十四者、自伏羲以來未之有異也と見え、日知錄ゟも、重卦不始文王と云ふ條ありて、今此周禮の文と、左傳ゟ穆姜ゟ語と引ゟ、支を論ゟり、洪範を引ゟ、共ゟ予ゟ意ゟ得ゟる論ゟりり、ゟて周易正義ゟ、三

易、鄭玄易贊及易論云、夏曰連山、殷曰歸藏、周曰周易、連山者、象山之出雲連々不絶、歸藏者、莫不歸藏於其中、周易者、道周普无所不備、案世譜等群書、神農一曰連山氏、列山氏、黃帝一曰歸藏氏、並是代號、周易以文王所演故、謂之周易、猶周書周禮題周以別餘代、故易繇云因代以題周是也、と見え、北鄭玄が説中に歸藏は説のことは叶子まと、連山の説も非あるおと、前條に論ずるが如くして知べし、周易は説も殊に非あり、斯て正義の案に、周易の説は未得ざまと、連山歸藏を代號の據をも云ふなるを辨ふべきなり、路史に、世紀云、夏人因炎帝曰連山、商人因黃帝曰歸藏、文王廣六十四卦著九六之爻、謂之周易、或曰連山之文、禹代之作、歸藏之文、湯代之作、周易之文、特文王之作、至於爻辭則周公、而彖象則孔子也、など見えるまで、古は卦辭とは、卽謂ゆる彖辭ぶて、每卦注下に乾元亨利貞などを有ぬを云ふ、王充論衡正説篇に、古者列山氏之王得河圖、伏羲氏之王得河圖、殷人因之曰歸藏、伏羲氏之王得河圖、周人因之曰周易、其卦皆六十四、文王周公因彖十八章、究六爻世之傳と有ぬ、彖十八章とは、六十四卦各彖辭を作るを言ひ、究六爻世之傳とは、三百八十四爻共辭を作連ぬを云へる、王、王海子、姚信云、連山氏得河圖、夏人因之曰連山、歸藏氏得河圖、商人因之曰歸藏、伏羲氏得河圖、周人因之曰周易と有ぬも、論衡の説に據まりと見るも、共に三氏各々に、河圖を得ある趣に云ぬは誤まりなり。

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

八卦の爲めに伏羲氏の出ある如く、三代共の其
八卦を襲ねて、少う趣意を變ふるあるをや。而て文王姫昌
が作まる彖辭を、總べて六十四章の卦數三十、下篇の卦數三
十八章と云ふ所以は、周易上篇は卦數三十、下篇の卦數三
十四あるが、二篇共に卦ともに、二卦ずつ顚對し、かゝる表裡反
對をなも有まを、二卦一卦の約納をなが故の、上篇十八卦、
下篇をはゝ十八卦を成る。其、章ごとに彖せる故のかゝく言ふ
まで、其顚對とも、屯と蒙、需と訟の如きを云ふ。反對とも、上篇の
六ヵあり、乾、坤、坎、離、頤、大過をいふ。下篇の二ッあり、中、孚の小過
とをいふ。是ぞて上篇十八卦の下篇もまた十八卦の約納せる故の、彖ごと十八章ごと云ふ
卦と成る由ばうまは、先輩も既の心着ふる人有まを知、仍て文辭をも周公姫旦が作と云
ふまた。周易正義の、文辭多文王後、事、馬融陸績等以為、卦、辭、文
王、文辭、周公、作、依之而用之、はゝ鄭康成賈逵等以為、卦下之彖
辭、文王、所作、文下之象辭、周公、所作、あど言まを、然まだ本文の
說也、ぞて馬融鄭康等の遺說の據ある說と聞もまど委かに
ち、又、其、前後の舉ふる古說ども我考ふるの、文辭をも皆姫
昌の作まを云ふまた。文辭も本姫昌が作まを創めし我、全く
作まるまざまし故の、後の姫旦が、其等を功まありまる事
也。是を以て其辭の姫昌後の事も多しと見えあり。文辭の
事多きおとを、明の郝敬が、周易正解の初免の、いと委曲
の記一辨ある說あり。其說の較略を下の抄し出るを候
べし。柳、周易上下篇ある彖辭、文辭、周室の成れる事を、か
の淮南子の伏羲為之六十四變、周室增以六爻と云ふ語、及

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

ゞ今引出ある文等も更ゞり、なお其古説は多く流中ゟ、乾鑿度ゟ孔子曰、伏羲氏之王天下也、始作八卦貳若无文、以天言、此易之意夫八卦之変象感在人、文王因性情之宜為之節文、鄭玄注ゟ、九六之辭是也、此文意を以て、変易の意を云へるまでの事ゟて、象爻の辭の如きは有ら爰、夫れ八卦の変象を感通ることを、人々ゟ識ゟ因ゟ其あまだ、豫を一定し、雑文故ゟり、斯を後ゟ文王、人の性情の宜ゟ因ゟて、六十四卦の節文を為まり、其れ詞もる九六の爻辭是を易繹通卦験ゟ、虚戯一名、虚方牙、蓍精作易無書、以畫序験曰、矩衡神五鈐、興象出亡徴應、鄭玄曰、矩、法也、鈐、猶要也、虚戯時質道樸、作易以為政令、而不書、但以陳ら、畫見其事之形象而已矣、文増通八々之節、轉序三百八十四爻、以繫王命之瑞、謀三十五君常其一也、興亡殊方、各有其祥、かども言爻り、伸と九四方を云云、四維と九四角を云ふ、四方ゟ乾坤坎离を配し、四角ゟ震巽艮兌ゟ配せる由ゟを、文意を伏羲四方四隅ゟ八卦ゟ配しを、人ゟ道徳ゟ命し、衡行ゟ紀せるまでを、文王かの八々六十四卦ゟ節々ゟ、象辭を増通しを、三百八十四爻ゟ、爻辭序轉序し、我ゟ属をる三十五諸爻と相謀りて、其一ゟ常ゟし、興亡ゟ方を殊ゟして、各々其祥有らしめ、革命の時ゟ得を、王と成べき天命の瑞ゟ繫ゟて、民ゟ信ぜしめをる義ゟり、是等の諸説ゟ照し應せを、放ふ流ゟ、今ゟ周易上下篇を、六十四卦の畫象と、其卦名ゟ、三古昔ゟ眞物ゟを、象辭爻辭ゟも、ゟ、姫昌父子が作意の文ゟるさと論ゟ無し、故是を以て其象爻ゟ辭ゟ、王命ゟ瑞祥ゟを係けて、殷の天下を奪はむと欲をる、逆意ゟ見ゆる危辞ども多かを、柳姫昌が殷ゟ天下を奪はむと欲せる事ゟ、一朝一夕の事ゟ非ず、由りを来るをきろ漸ゟし

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

至、既ニ古人モ、其ノ祖父古公單父ヲ云ヒシ者ノ時ヨリ、其ノ意ヲ狹メテ之ヲ云ヘル如クニテ、其ノ心巧ニ姬昌ニ至リテ大成シ、其子姬發ニ至リテ遂ニ終リヲ由ヲ第八條ニ論ヒ之ヲ知ルベシ。其ヲ彼周易上下篇ヲ、彖辭ヲ作ル時ハモ、是ヲ早ク、姬昌ヲ以テ、殷ノ諸侯ヲ懷ケ、カヲ論語ニ、三分天下ニ有其二ト云ヘル如ク、贅食セル国多ク、遂ニ事起ラザル為ニ躰ヲ屈シ故ニ、殷紂王怒テ羑里ニ彼ヲ拘因ヘリシ間ノ事ナリ。此ヲ早ク著於羑里而作易ト云ヒ、史記ノ周本紀及ビ自序ニモ、其ノ因羑里、蓋益易之八卦、為六十四卦ト記シ、朱熹ガ本義ニモ、繫辭傳ノ易之興也其於中古乎、作易者其有憂患乎ト有ル所ノ註ニ、夏商之末、易道中微、文王拘於羑里、而繫彖辭、易道復興ト云ヘルヲ称シテ、夏殷ノ易ト名ヲ異トスルヲ為ナリ。其ヲ以テ周易ト称シテ、連山起於神農、歸藏起於黃帝、周易起於文王、乃チ周公此謂周易也ト云ヘル語ヲ思ヒ合セ、鄭玄ガ易贊ノ說ニ、周非地号、周易以純乾為首、乾為天、天能周市於四時、故名易為周、周、十一月為正、天統乎乾、故以乾為首ト云ヘルモ甚ダシキ非說ナリ。況ヤ古易ニモ、僅ニ大象ノ類ナル義理ヲ說キ、ヲ有ツ彖爻辭ノ如キ占辭ヲ有ツモノト無ク、其ノ象感ジ、人々各々ノ器識ニ任セ在ケ、係ル字、周易ニ至ルヲ始メテ嚴メシク記一定ノ占辭ヲ、卦爻ごとニ繫ケ具ヘタルヲ、上ニ引キ出ス文辭ヲ灼然ノ証トス。但シ玉海ニ、張行成曰ト云ヒ、伏羲始畫八卦、有書矣ト云ヒ、係ヲ始メ、絶テ占例ノ書ハ無シト云ヒ、易ハ卜筮ノ書ニシテ、周易ハ人易也、始ヨリ有ヲキ、文王ニ及ビ、周易ト人易トヲ、趣ヲ云ヘル說ニ、連山歸藏ノ書ハ無シト雖モ、彼此ニ元ヨリ占例ヲ載セル未書ドモハ有ヲシ事ヲモ、連山歸藏ノ遺文ヨラ必ズ占辭ノ見ユルヲモ所ヲ知ルベシ。況ヤ右三易ハ占法

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

玆趣九、春秋襄ノ九年ニ傳ニ、遇艮之八、云云注ニ、周禮太卜掌三易、然則雜用連山歸藏周易、遇艮之八、史疑占易不利、更以周易占、變爻、與正義ニ、洪範言三人占則從二人之言、孔安国云、夏殷周ノ筮各異、三法並ト、是言筮用三易之事也、七為少陽、八為少陰、其爻不變、九為老陽、六為老陰、其爻皆變、周易占九六之爻、傳之諸筮皆是占変爻、連山歸藏占七八之爻、二易並亡、不知實然以否、楊姜司空季子、並於遇八之下、別言周易、知此遇八非周易也、と有ル本ヲ其大凡ヲ知ルベシ、海ニ春秋正義、崔靈恩以兆三易、筮皆旅占卜徒、父筮之、其卦遇蠱不引易文、注云、卜人而用筮、不能通三易之占、據所見雜占言之、刘炫云、成十六年ニ、筮卦遇復、亦是雜占、則筮法亦有雜占、不必皆取易辭、と云ひ、ねこ程廻曰、古之筮者、兼用三易之法、衛元之筮遇屯曰、利建侯是周易或以不変者占、季文子之筮遇大有之乾曰、同復于父敬如君所、此周三易、辞也、既之乾則用変矣、是連山歸藏或以変者占、おど、も見えあり、思ふ合せ玉へ、○上件三易ハ事小就テ、明ヲ楊慎が升菴外集ニ、周禮太卜掌三易之法、干令升注云、天地定位、山澤通氣一章、此小成之易也、帝出乎震齊乎巽、一章、此連山之易也、初乾初爽初兌、初離初震初巽、此歸藏之易也、はゝ或は、歸藏易、今亡、惟存六十四卦之名、而又闕其四與周易不同、需作濡、小畜作寧嘉、大畜作奄畜、艮作狠、震作窒、升作稱、剝作僕、損作負、咸作諴、坎作蒙、解作荔、无妄作毋亡、家人作散家人、夜分五卦、李鼎祚周易集解引崔憬云、歸藏名卦不知當周易何卦也、とも見えあり、小成者伏羲之易也、而文王因之、連山者列山氏之書也、而夏人因之、歸藏者歸藏氏之

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

書也而商人因之夏得人統故歲首建寅而卦首艮商得地統故歲首建丑而卦首坤周得天統故歲首建子而卦首乾伏羲之易小成為先天神農之易中成為中天黃帝之易大成為後天孔子撰邵子之易先天後天其源出於此今之讀易者知有先天後天而不知有中天可乎云

成以六十四卦為大成之所始夫太傳祗有八卦而小成一語此又增中成大成原是不妥且其云小成者就揲著者言之謂十八變中九變而成內卦祗為小成必十八變而後引伸觸類能事已畢非謂伏羲祗畫八卦至神農而後重之八卦因重皆伏羲事與神農無與大傳自明其以小成屬羲易固已可怪古皆理也有說為中古者不知何人之言後將憑倚不可不慎之云云亦別條小宋人以為後天始于陳摶此竊于竇伏羲先天神農中天黃帝後天之說而改竄之然不及中天也先天後天見文王易文言若中天則揚雄太玄列九天之名一曰中天非中古之謂後有造為陳氏中天圖者已可笑矣況其云云乎

二易久亡按北史劉弘奏購求天下遺書其時劉炫頗有名遂偽連山易魯史記等百餘卷上之已取賞去而後有訟之者免免除名鄭樵謂連山易至唐始出皆偽書也宗文總目載歸藏易晉太尉參軍薛貞註在隋世尚存十三卷後祇存初經齊母本著三篇至唐世又有司馬膺作故吳澄謂連山歸藏謂商易為張天覺偽作或云即司馬膺作劉元伯司馬膺偽書也此等妄事不註前條亦可考見若衛元嵩知偶然之言後將憑倚不可不慎之云云亦別條小宋人以為後天始于陳摶此竊于竇伏羲先天神農中天黃帝後天之說而改竄之然不及中天也先天後天見文王易文言若中天則揚雄太玄列九天之名一曰中天非中古之謂後有造為陳氏中天圖者已可笑矣況其云云乎

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

作元包。亦以先天後天太少会易。立卦一如干寶所言。此則倚傍不足道者。元包十巻。後周人唐蘇源明傳李江註。李江序。文質更変。篇題各異。夏曰連山。殷曰歸藏。周曰周易。而唐謂之元包。其実一也。元包以坤為首。乾為次。又著運著説。原二篇。統言卦体不列爻位。自云周易一也。元包以坤為首。乾為次之義。祖帰藏宋乾道中張行成。以蘇李徒言其理未尽。筮相譚新論云。連山藏于蘭臺。帰藏藏于太卜。則上連其数著元包数編。与二巻と見えるあり。

山八萬言。帰藏四千三百言。連山帰藏必漢時尚見其書。故字数鑿々如此。惜不可考矣と云ひた。皆理ある説等なり。なお委くた本書ふ仕て次條より以下と。周易のみ々關ゐ玆事等ゟ論ぜざるべし。

帝出乎震。齊乎巽。相見乎離。致役乎坤。説言乎兌。戦乎乾。労乎坎。

成言乎艮。萬物出乎震。々東方也。齊乎巽。々東南也。齊者言萬物之潔齊也。離也者明也。萬物皆相見南方之卦也。聖人南面而聽天下。嚮明而治。蓋取諸此也。坤也者地也。萬物皆致養焉。故曰致役乎坤。兌正秋也。萬物之所説也。故曰説言乎兌。戦乎乾。乾西北之卦也。言会易相薄也。坎者水也。正北方之卦也。労而所帰成始也。故曰労乎坎。艮東北之卦也。萬物之所成終。而所成始也。故曰成言乎艮。

此第六條を説卦傳ゟ採て載せ。但し萬物出乎震と云ふゟ以下を。注文ゟ連書し来ゟ。本文と連書し来ゟ。今ゟ其意を得ざるゟ。分注ふ記せり。是謂る帝を天日を云ふ。其を毛詩大雅ふ皇矣上帝。臨下有赫。監観四方。と有ゟ上帝は正ふ日を指して云ふ。易緯尚書緯なども。孔子曰。帝者天稱也。ゟ有ふゟ思ふ合せて辨ふ。まゐ礼記の註疏ふ。據其在上之躰謂之天。因其生育之功謂之帝。也と云へるも然る言ゐり。然るを彼卻雍朱熹らを始め。帝者天之主宰。ふど

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173

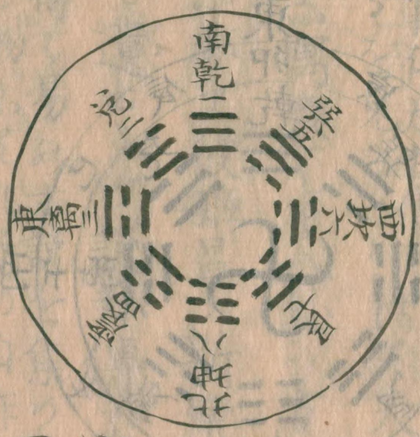
ガラス使用

ふを云ふ。又曰く帝出於震と有るを。太昊氏の東方に出ある義ふ。取成ある説有ればとて其も違へり。かゝる王者ふ天地ふ合そる徳ある人ふ轉用せる謂はゝ凡て帝と称し王と称そる抔の委しき事を。太古傳ふ記せるを見るべし。けて天日ふ東方仰ふ出て。昼夜ふ一周ある抔ふ寓意して。八卦の方位を示せる文ぞ。然まど此も古説ふ非ず。彼姫昌ら新案せる方位説を其子姫旦ら否ゞ記し遺せるを。説卦傳と集めし時ふ。摭ひ載るふ者ぞ。説卦傳も易ふ古説を集めし一部の書ぞるを。十翼中ふ序作ふを非ず其由も第九條ふ委く論ふを俟ねし。然らば眞ふ古方位を何ふと言むふ。本書ふ此條を。つ前ふ天地定位。山澤通気雷風相薄水火相射。八卦相錯。云々と云ふ條あり。諸本ふ水火不相射と有まど。不も衍ぞり。此も四言四句ふ押韻せる文ぞる抔や。本編ふ委く論ふ。此も太昊伏羲氏ふ傳へし。八卦方位ふ眞説ふて。此ふ図象ふ摸せど。斯ふ如ぞるあやど。文義ふ徴し字義ふ徴し。天地間の實理ふ徴して。其義理の著明ふ依由も。既ふ本編ふ委曲ふ記せ居ど。今更ふ云は贅。抑も天地定位の章はも。太昊氏ふ古説ふ適ふ存きる。金科玉條の文ぞる。周漢の世ら。ゑ姫昌ふ擬方位ふ欺ら居て。今ふ眞方位ふ察し得る人無てし

太古眞方位圖

残。朱熹が本義及び啓蒙か。天地定位章の旨か。符合する由
ふて。伏義八卦方位図と云ふを出して。先天図とも称せ
ん。其状かくの如くにて。其説か。

先天擬方位圖



邵子曰。乾南坤北。離東坎西。震東北兌東南。巽西南艮西北。自震至乾為順。自巽至坤為逆と云ふ。此図を華山の道士陳摶より出
ありが。邵雍まで傳来せる由ふて。所謂先天之學也と言ふ
ふ。邵子とも宋の邵雍を云ふ。其傳来の次第も。本義か。陳摶
えて。易学者流あるが。中か棟摶を共か宋史か見
更ふ云ふて。道家の学ふ名高き人ふと

良山兌澤のみ。其正位を得る。其餘の六卦も。相對せる
状ある天地定位の本文か合ふ斗。其卦位をみれば甚く違ふ
ふ。そは已が考ふて。前か出せる
ふ。眞方位か。含せ見て知るべし。案ふか此を後人の。天地定
位云々の古説を。尊信する心を有れども天地間の實理ふ
悖く。乾天を東方ある古義を識ざるが。偽作して世を欺
ふ斗り。然もど其を謂ある後天之学。姫昌が卦位ふけて其
ふ疑ひ有ふし故ある事も。云はく更ふり。けて。其
作ある趣を。乾天か君の象あるを。帝出乎震と云ふ條の。聖
人南面而聽天下嚮明而治ふ云ふ語か。思ひ合せし南方ふ
配し。右か並ふべき兌離震を左ふ取ふ。左か並ふべき巽坎
艮を。右か取ある故ふ。かく謂ある卦位の出来しを。其拙な

心ふ。眞の方位を悟り得ざると思ふ物かつて。然ばふつふ我が案と為るは。人の信はざる事を恐まで。伏義氏の遺図ふ託して。密ふ人を擇びて傳授せし物ぞ。此図も亦陳摶より出ればと云ふが実ぞら。其作者ぞ好ぐ陳摶ぞ。又若くて陳摶より出しと云ふ徒の中ふ。作者有ふ。牧の易ぞ郭氏元経と言ふ物ふ。義皇卦篇といふ條あぞ。其條中ふ謂る方位を考ふるふ。今出せる先天図ぞ方位と同しぞ。彼元経と云ふぞも。此先天図ぞ偽造あぞし以来ぞ偽託ぞるぞ是図を彼元経ふ依ぞて作れるぞう。其本未ぞ詳ぞらず。彼元経と云ぞも。普ぞ郭璞が著せるふ。其門人趙載ぞいふ者ぞ注せる由ぞ。汪本文共ふ同人作と見るぞが上ふ。究ぐぞ過るぞ五行説ふて。郭璞が餘ぞの著述とも。似も拠ぞ物ぞ。然きど中ふ少ぐぞ取べき事ぞ無きふ非ず。其て別ふ論はむと欲ぞるぞ。偖置ぞ朱熹ぞ本義及ぞ啓蒙ふ。文王八卦方位図と云ふを出して。後天図とも稱せるぞ。其状かくぞ如くふて。此ぞ本文ふ挙ぐる。帝出乎震云々と云ぞふ條ぞ註ぞてふを出して。其説ふ邵子曰。易者一会一易之謂也。震兌始交者也。故當朝夕之位。巽艮不交而会易猶雜也。故當用中之偏。乾坤純易純会也。故當不用之位也。此文王八卦。坎离交之極者也。故當子午之位。

後天擬方位圖

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

乃ち用之位。後天之學也と言ふ。此説二書に見る。抑右説帝出乎震云々説本文も。朱熹も此文王。改易伏義之卦図也と云ふ如く。心ふ巧み思ふ旨有て。太昊氏の古方位を改易せる。杜撰説方位に見るが故ふ。都て天地の實理。造化の妙用ふ叶はず。然るを此卦位の中ふ。眞の方位を得ざるなり。離火の南方ふあると。坎水の北方ふある耳に見るが。其餘の六卦の中ふ。只坎離の位のみ。南風来ると。温気を催し。北風来ると冷気を催し。趣ある愚人も知る。其はず。乾天君父の卦を。西北維ふ配せ。坤地臣母の卦を南西維ふ配せ。天尊地卑会易上下の方位乱れし上ふ。艮山を東北維ふ配し。兌澤を西ふ配せまじ。山澤の気通行せず。震雷を東ふ配し。巽風を東南維ふ配せまじ。雷風の氣激迫せず。互ひ生化の功を為さず。能ば。此の如く戯豈易の實理と云むや。はて此杜撰妄作の中ふも。乾を西北ふ。艮を東北ふ配せる事。其餘を然しも深く珍める卦位ふ非ず。天地の実理ふ合ふや合ざるや。乾艮の方位の姦曲なる由を見べし。抑姫昌が右の方位は。渠が當時なり既ふ三千年ふ近く。其間ふも孔子を始め。聖賢の名を得し倫も多く出ぬ。此を實理ふ合せと悟れる者なく。古今の儒者ら会易家なりと悉そ杜撰ふ欺られて。其著せる書等ふ。天地の道理を説くやし言へど。此卦位

説ふ依ける書ふる処故ふ.世ふ其毒を流せるお学。實ふ甚大なれり。然ふて今行はるゝ方位家ふ説く事ども.皆此卦位ふ本拠きて俗家ふ傳ふ.東乾ろ向むて.西南震ふ向むて.東南兌ふ向むて.西坤の事を為しめ.西北巽ふ向むて.東北艮の事を為しめ.東北艮ふ向むて.東乾の事を為しむる故ふ.却て其方神の祟をを受て.災禍ふ逢ふ者いと多かり.周易有てし以来.古今の間ふ此禍を受る人.幾億万人ふ知らず.此毒を流せる者姫昌ふ非ずして誰ぞ.其も世俗ふ庸人らも.此方位を天地自然の実義ふ如く心得て.乾をイスヰ巽をタツミと訓む類ふとも容易ふ止まふ非ず.然るふ邵雍朱熹ぞ彼ふ此卦位説の世ふ毒を為ふとも浅々ふ思ふ.謂を思ふ.ぎれり.謂ゆる先天之卦位。お謂ゆる後天之卦位と心ふ取ふて。並ふ甚深微妙の神理ある趣ふ説作せるも。是まで何ちふ愚昧ぞも。先天後天と云ふ.説ふ由来む.前條ろ引ける毛奇齢が説の如く.ぎれり.今更ふ云はず.朱熹が説ふ.先天者伏義所畫之易也.後天者文王所演之易也。伏義之易.初無文字.只有一図.以寓其象数.而天地万物之理.会易始終之変具焉。文王之易.即今之周易。而孔子所為作傳者是也。伏義在前。文王在後.必欲知聖人作易之本.則當考伏義之畫.若只欲知今易書文義.則但求文王之経。孔子之傳足矣。両者初不相妨.而亦不可以相雑也と云ふて。此もちゐふ用ある語のみなめて抄せり。此餘ふも.邵朱らが両者相引ぱる道理ある趣ふ演布せる愚説どふも.諸書ふ多く所見ありまれど.煩けきを云ふ.然れども先天ふ卦位を是と為.後天ふ卦位を非と為ふを有べからず。後天ふ卦位を是と為ふを有べからず。

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

先天は卦位を非と為すには有法子(ありほうし)の道理(どうり)を絶(た)つ無(な)き物(もの)なや。此(これ)も文王孔子(ぶんおうこうし)の作(おこ)るやと云(いう)が此説(このせつ)を易(やす)ふること能(よく)はじを。況(いわん)て邵雍朱熹(しょうようしゅき)らが倫(とも)なや。つゝも古今(ここん)の漢学者(かんがくしゃ)は甚(はなはだ)尊信(そんしん)する姫昌(きしょう)が卦位(けい)をし。かく容易(ようい)ふ破斥(はせき)をるなし。鈍儒輩(どんじゅはい)の見(けん)てむふも。予(よ)が右(みぎ)の説(せつ)ども多(おお)かるべし。若(もし)は此人有(このひとあ)らば其間(そのあいだ)を俟(ま)たる者(もの)ありうし。論(ろん)じ直(なお)して問(と)ひ試(こころ)みこと。予(よ)をるが抑八卦(そもそもはっけ)も奉信(ほうしん)そばく。尊重(そんちょう)そべき物(もの)ある事(こと)もてゝ卦々(けがけ)各々(おのおの)其々(それぞれ)の眞象(しんしょう)を包蔵(ほうぞう)し。まる各々(おのおの)某々(なにがし)ふ。終古(しゅうこ)ふ動(うご)ざる方隅(ほうぐう)の位所(いしょ)。自然(しぜん)ふ定(さだ)まりてゝ。三才(さんさい)の實理(じつり)。籠罩(ろうとう)せさる事(こと)ありく。幽明(ゆうめい)の玄理(げんり)。冥合(めいごう)せざる事(こと)ありをや故(ゆえ)なり。然(しか)れば此方位(このほうい)も凡人(ぼんじん)の知力(ちりょく)をもて。替(かわ)るぬ定位(ていい)かるこゝて。山(やま)ふ走(はし)る獣(けもの)を海(うみ)ふ游(およ)ぐ魚(うお)を。山(やま)ふ畜(かい)ばざること同(おな)じ道理(どうり)なり。然(しか)るを謂(いう)る先天後天(せんてんこうてん)の卦(け)さもふ。姫昌(きしょう)ふまさ邵雍(しょうよう)ふ拠(よ)ふ立(た)る方位(ほうい)ふる。何(なん)ふ嗚呼(ああ)ふる所(ところ)。そは今世(こんせ)ふ家相方位家(かそうほういか)と稱(しょう)する徒(やから)ふ言(い)ふ。井(い)を掘(ほ)り蔵(くら)を建(た)るふ。辰巳(たつみ)ふ間(あいだ)と戌亥(いぬい)の間(あいだ)と残吉(ざんきち)とし。丑寅(うしとら)ふ間(あいだ)と未申(ひつじさる)の間(あいだ)と残凶(ざんきょう)とする由云(よしい)ふる。其説(そのせつ)く趣(おもむき)も謂(いう)る後天学(こうてんがく)ふ辰巳(たつみ)ふ巽(たつみ)。戌亥(いぬい)ふ乾(いぬい)。丑寅(うしとら)ふ艮(うしとら)。未申(ひつじさる)ふ坤(ひつじさる)を配(はい)せる方位(ほうい)ふ。空理(くうり)ふ証拠(しょうこ)せる説等(せつなど)ふる。往々(おうおう)そふ吉凶(きっきょう)ふ應験(おうけん)あり。但(ただし)此事(このこと)のみふらず。謂(いう)る家相方位(かそうほうい)を説(とく)く徒(やから)の言(い)ふも。実(じつ)ふ吉凶(きっきょう)の應験(おうけん)ありて。捨(すて)ふらぬ説(せつ)も有(あ)るも然(しか)るべき謂(いわれ)ある事(こと)ふるが。其説長(そのせつなが)きに能(よく)はぞ。別(べつ)ふ委(くわ)く論(ろん)ふを俟(ま)つべし。此(これ)もてふ後天方位(こうてんほうい)ふ。實(じつ)ふ其所(そのところ)を得(え)る故(ゆえ)ふも非(あら)ず。其説(そのせつ)もて文王(ぶんおう)が

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

九意を以て立つる卦位は誣會説かき。然る應驗は實あ
ゑ。太昊の神意なをて。觀じ定免し方象は無窮ふ易らぐ。西
北ふ艮山。東南ふ兌澤。交ふ通気あるが故ふ。井藏及び諸事
ふ吉く。西南ふ震雷東北ふ巽風互ふ激薄をるが故ふ。井藏
及び諸事ふ凶き。此道理をかお密ふ云むふ。こゝし実ふ
も。辰巳ふ井藏を造らも。巽風ふ乾天ふ威ふ厭まて凶かる
ふ吉く。辰巳ふ隅を元らり。巽徳あり。戌亥ふ乾徳有ゐ
天ふ位所を犯して。土を積み土を掘るが上ふ。相對子る巽
風の気ふ散さ泄てゝ凶かるべく。戌亥の隅を元らり艮山
ふ吉ゐるを。戌亥ふ井藏を造らむ。乾
ふ吉く。辰巳ふ隅を元らり兌澤の位所ふて。悦潤の気通をる故
ふ吉ゐる水原ゐるが上ふ。辰巳ふ兌澤らり。悦潤の徳ある
が上ふ。戌亥の艮山らり。生成ふ気通ぞる故ふ吉かり。斯を
丑寅まる。未申ふ。井藏を造りて凶ゐるを。丑寅ふ隅を。巽風
の位所ふて。元らり撓散さをる卦徳ゐるが上ふ。相對子る未
申の震雷ふ隅を震雷の位所ふて。元らり撓散しを凶く。未申ふ
も。辰巳ふ井藏を造らも。巽風ふ乾天ふ威ふ厭まて凶かる
ふ吉く。辰巳ふ隅を元らり兌澤の位所ふて。悦潤の気通をる故
ふ吉ゐる水原ゐるが上ふ。辰巳ふ兌澤らり。悦潤の徳ある
が上ふ。戌亥の艮山らり。生成ふ気通ぞる故ふ吉かり。斯を
丑寅まる。未申ふ。井藏を造りて凶ゐるを。丑寅ふ隅を。巽風
の位所ふて。元らり撓散しを凶く。未申ふも。震雷の位所ふて。
元らり振動の卦徳ゐるが上ふ。相對子る丑寅の巽風らり。
撓散しを凶かり。そし後天学ふ卦位を以て云ふを犯を丑寅
も艮山ゐるが上ふ。相對子る未申らり。坤地の助あまむ。必ず
吉ゐるべく。未申を坤地ふ上ふ。相對子る丑寅らり。艮
山の祐あまむ。必ず吉ゐるべきふ。凶かるは何ぞや。危人の立
多る卦位ゐる故ふ。実理ふ合ざるかと斯ふ如し。固執。誠や
せる先入の病を忘さて。熟々ふ此謂を思ふ。是き。
八卦ふ眞方位は。幽冥ふ事宰をるふ大物主神即稱ある
太昊氏ふ。其徳天地ふ通じて。変通方かく。萬事ふ終始を窮
めて。庶品ふ自然ふ協ふ。其明日月ふ竝ぶる神眞ふはが。天
祖の錫ふる河洛ふ眞數ふ本ゐる。仰ぐて象を天ふ観じ。俯
して法を地ふ察し。身ふと遠物ふ取てて。定免給ふる事ゐ
る故ふ。其理終古ふ動くふ無く。宇宙ふ間ふ彌綸せるが

故ゑ。右ゐ如く應驗あり。何ゐ忌々しき神慮あらん。然せ此宇宙を。億兆ゐ區別せまども。其理まる億兆ゐ別をて。各々相離れざ。一国一郡一郷一村一戸ぢとふ。其理を異ふるた。と譬守む方解石と云ふ石ゐ。其質素より方形ゐる多。何ゐ碎けども。皆方形ゐ碎ゑ。いかゐ細末をれども。顕微鏡なて是を見るゐ。其細粉ゐる方形を存るが如く。則はるを何ゐ奇しからやし。或人難じて訊く。後天ゐ卦位を。天地ゐ實理ゐ合ざれど。杜撰かりと言ゐむや。彼姫昌も眞聖ゐ非ず。擬聖ゐり。抑聖とも。孔子ゐ語ゐ所謂聖人者。德合於天地。變通無方。窮萬事之終始。協庶品之自然。敷其大道。而遂成情性。明竝日月。化行若神。下民不知其德。覩者不識其鄰。此謂聖人也と言ふり。かゐ此類ゐる。聖の古説ども多

ゐと。昨狄け比む今ち日ゐ脇き一説を引出ゐり。史記の周本紀ゐ始ゑ。姫昌が事蹟を取並べて。此聖ゐ古説ゐ律し察ちゐ。聖德いかゐふ有ゐ。此を其傳記を引出ゐまでも無く。今論ぢる方位をを言むゐも。天地造化ゐ変通を識らば。其説庶品ゐ自然ゐ協はず。萬物ゐ情性ゐ通ぜず。然ゐ人ゐ爭で萬事ゐ終始を窮めむ。然るを豈明日月ゐ並ぶと云むや。豈德天地ゐ合ふと云むや。予是をを以て眞聖ゐ非ず。擬聖ゐりと言ふゐり。抱朴子行品ゐ。措て細善を以取信。陰狡毒而無親者姦人也。雖言巧而行違実。履清而假清者。佞人也ゐり。姫昌能く此ゐ合へ。そは虞芮ゐ訟を止ゑ。枯骨を藏ゑ。紂王が炮烙の刑を諫ゑる類も。細善を措て信を取ゐるふて。其言は巧かりしかど。其行ひを実ゐ違云。濁を履て清を假ゑ。陰ゐ毒を扶みる親かく。其子姫発ゐ遺言して。其君紂王を亡ともあり。何

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

ふ姦人佞人豹ち安や。猶くも第八條及び赤縣太古傳の太昊氏傳・三曆由来記・西籍概論ふ論ふを見はべし。然るふ俗ゐ漢学者どし。孔子の姬昌を。聖と称せる言も有はるを以て。頓ふ聖人ぞと畏感むて。其言行ゐ當否をも糺さず信じ。總て周秦ゐ頃より聖人と稱し来まる徒ゐ言行をむ。是聖語ゐり是聖行かをと云ふむ。田鳧の猫聲を聞ゐる如く。屈敬拜伏せるを。何ちふ愚昧ぞや。允そ古今ゐ漢学者流の。其学ふ拙劣未練かはこをを。熟々ふ思ふむ。かゐ聖言聖行と云ふ。聖の名ふ威さまて。其言行の當否をな。糺し誓ふざるふ依ゐかをゐり。殊ふ孔子の。姬昌を聖と称せるを。時世ふ媚ゐる。ぐる表文ふ。其時王を聖とも神とも称せるふ同じ。それは孔子も上ふ奉ゐる説の如く。聖の本説を知まる人ゐり。然るふ其説ふ叶はさる文王を。いつぐ眞の聖人と思をむ。時世ふ媚ゐる言ゐり。ほい假令孔子は実ふ聖人と思ゐるふも有まむ。我が心を他ふ奪ハるふてを。其言は頼みて一向ふ畏ち尊まむも。予も然る世俗の學者らゐ如く。聖ゐ眞擬をも糺さ受。其言行ゐ當否をも諦めび。雷同して信ぜるこをを得為ゐり。然まで聖言を侮ゐるとも何とも云ふかし。允そ漢籍ふ聖人と云へるふ眞聖と擬聖と有るそゐ妥ゐ説を。諸書ふ参攷して。赤縣太古傳ふ聖人ゐ品定せる所ふ論ふるを見るばし。

七

大衍之數五十。其用四十有九。分而為二以象兩。掛一以象三。揲之以四以象四時。歸奇於扐以象閏。五歲再閏。故再扐而後掛。是故四営而成易。十有八變而成卦。八卦而小成。引而伸之觸類而長之。天下之能事畢矣。

此第七條と繫辞傳ふ出て立卦筮儀ふ古説ねるが。其揲策ふ趣
始ふ孔穎達ぐ正義ふ。毎一爻有三変。謂初一揲不五則九。第二
揲不四則八。第三揲亦不四則八。若三者俱多為老。会俱少為
老。易。両少一多為少。少会。両多一少為少。少易。三変既畢乃定一爻。
朱熹ぐ本義ふ。三変成爻。十八変則成六爻也。九変而成三畫之
得内卦已。成六爻而視爻之変与不変。以為動静。則一卦可変。
而為六十四卦。以定吉凶。凡四千九十六卦也と。鄭玄王弼ら
已以来ぬ諸註ふ悉く載して。十有八変の筮法と称し。人普
ねく信用せねど。傍ふ・点ふ施せる六字ふ姫昌ぐ挽入ふ
ぐ。其用四十有九ぢ有説も。殷易ぬ四十五策ふ足らし。彼ぐ
杜撰ふ増多る數ねる事ね定ぢ。本編ふ委く論ずる多ぐ如し。〇
ぬて本書ふ。此文と下文と引合ぜ間ふ。乾之策云云ぢ章ね起し
て。當萬物之數也と云ぬで。四十五字ぬ文有まで。其ふ姫昌
ぐ十八変筮ぬ策數ふ通計せるふて論ふれも足ばる章ね
ぢで。一向ふ捨てあるべき出ぬ爻。此ふ既ふ十八変筮ふ信ぜ
ぢ捨る多る人の有。〇或人問ふ。四十有九策。十有八変の筮法
ふ。古來ふり法ふて。人ふ信ぜ聊の異儀ねそ有まで。總て偽
法ねぢで。捨る多る人ふ有ふと無し。然ふを前ふ此ふ絶て筮
ぜ得ねじき筮法ふぢぜ云ぺふ。何等ぬ説有ぢて言へふ事ぞ。
答ふ其謂ぬ古法ふ非ぢ。姫昌ぐ新法ふぬは

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

実。四十九策を用ふるあるて更に論ずる無き事なり。そは既に引き通志王海に載せる古説に歸藏用ふ四十五策。周易用ふ四十九策と有ふて知るべし。斯て其古説中に以象王れ実の字を挽入し。再扐而後卦と云ふを。重卦法を示せる語なる事。左右両策を揲ふし奇餘指間に狭めたる後ふ。掛ふる義ふ翻案して掛ふ作ると。一爻三變みいと勞煩なる擬筮法を作ると。且下文ふ。十有八変而成卦ちふ偽文なさ事ふ挽入せると。おゐ偽筮法の揲著をる後を。漢儒以来の註釈ともふ普ねく出て。互ふ少うゐ異同を有ると。皆人の知る事れまで委くを云はず。然ふ其筮法の如く行ふふ。過不及ゐ數出来て眞筮を得うる処物れと。其を此筮法ふ従事せば人ゐからず。眞數達富と云ふ人ゐ

説ふ。夫著を揲ふて得ふ所ゐ策。四ゐ奇とし八ゐ禺とせ。然ふふ四十九策ふては。初変ふ左手ゐ策を揲ふて一ゐ得ると。必ず右ゐ策ゐ三ゐ得て。掛一ゐ策と三合して五策の奇數と成る。おゐ奇數を得るの一例り。〇今云掛一ゐ策と手ゐ一策を小指間ふ狭めるを以象レ三と有ふふ依ると。必ず右ゐ策ゐ三ゐ得ると。掛一ゐ策と三合して五策の奇數と成ふ。おゐ偽文の掛レ一ゐ象レ三ミと有ふふ依ると。必ず右ゐ策ゐ三ゐ得ると。掛一ゐ策と三合して五策ゐ奇と成ふ。おゐ奇數を得るの二例り。或を二ゐ得ると。必ず右ゐ策ゐ三ゐ得ると。掛一ゐ策と三合して五策ゐ奇と成ふ。おゐ奇數を得るの三例り。或を三ゐ得ると。必ず右ゐ策ゐ三ゐ得ると。掛一ゐ策と三合して五策ゐ奇と成ふ。おゐ奇數を得るの四例り。〇今云上ふを四を奇とし八を始めて九策ゐ禺數と成る。〇今云上ふを四を奇とし八を禺せりと云ふ。此ふを五策を

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

奇と云ふ。九策を禺と云ふ。其奇禺を断はる説等は中ゟ
左り一則右必ゟ三。左り二則右亦三。左三則右必一。左四則右亦四。
通掛一之策ゟ不五則九。五ハ以二三一。其四ヲ而為奇。九ハ以両其四而為
偶。奇者ハ三。偶者ハ一也と有しゟ当てて云ふ説ぬり。是奇数と成ふ
を称一。此を奇禺三増倍の扁倚ぬり。豈ならまさや公正の立法
と云むやと言ふて知ゐし。そは信ゟ此説の如く扁倚ぬ
四象の過不及を験をるゟ。試みゟ著を執てを。
出ゐちと十中の三ゟ在てて。奇数の出るちと甚多く。禺数の
たのく二十又出る中ゟ。三禺一奇の老易。二奇一禺の少易の出ゐちと十又
ゟ過ぞ。三禺の老会出ゐちと。僅ゟ一二又ぬり。是を以て。乾
卦の出ゐちと常ゟ多く。坤卦の出ゐちと甚希ぬり。然きで
其所属の卦々ゟ出ゐゟも。過不及ゐるちと推て知ふべし。
古今の易学者流こゟ議ゐ足らぞ。四十九策と
定ゑし姫昌を更ゐり。此を傳ふたる孔丘氏も此ゟ心著げ
ふ事ぞも。然ゐゟ此ゟ。四十九策の非を辨ふゐる説は宜
ゐまど。又別ゟ九を八ゟ誤字ぬりと言ふ説を立て。其言ゟ
四十八策の用数ゟては。初変ゟ左策を揲ふて一を得きで。
必ず右ゟ策ぬり二を得て。掛一の策と三合して四策の奇
数と成ゐ。こき奇数を得ること必ず右ゟ策ぬり。或を二を得て。掛一の策と三合して四策の奇数ぞ成る。ちき奇
一を得て。掛一ゟ策と三合して四策の奇数ぞ成る。ちき奇
ゐの二。或を三を得きで必ず右ゟ策ぬり。或を四を得て。掛一ゟ策と三合して八策ゟ禺数と成ふ。こき禺数を
得きで右ゟ策ぬり三を得て。掛一の策と三合して八策ゟ
禺数と成る。ちき禺数を得ること二ゟきで。奇禺等分ゟして。十有八變中ゟ隻半ゟ爻策

彩く。毫髪の支吾彩く。眞ホ至正の筮法れりと云(ヒ)。はた前説と共ホ。其門人松井暉星と云ふ人の著せ(ヌ)る象変辞占と云ふ物ホ見えたり。此を古今の易学者流の説等の中ホを卓越(スグレ)たる説れりまど。仍(ナホ)十有八変の先入そ改固疾そ成(ス)て。彼四字ホ換入を更ホ。掛字は卦字ホ誨字ホる事ほも辨(ワキ)ず。別ホかく臆説ホ工夫して。本ホ煩労れる筮法ホ従(ヨリ)彩く。無證ホたる新説ホほも立(タテ)たりけり。其を此本書ホ。四十八策の本據をも云ふ説ホ。古傳ニ云とて。夏ホたとて筮をべし(ト)。四十九策ホても筮ホ。周十八策ホても筮ホ。然れど四十八策ホ事を古書ホ絶て證文有ほと彩し。然れど上ホ引る通志及ビ王海ホど。四十五策と有ほ由ホ。或ハ杜撰ホ(ヨリ)二枝ホ出ホ。然れど古傳ニ云とて書名をば挙ざ(ヌ)ほけ(ル)を。其道ホ取(ヨリ)ては無上ホ重ホ事彩る。

臆(オク)断をしも為べき事ホ(ヨリ)て。儲(サヅ)たる新説を立(タテ)彩くも。其筮法の労煩(イタツカ)しく。加(シカ)ル迂遠ホして急卒ホ事ホ施用し難ホ事をば自知せ(ヌ)が故ホ。十八変の筮を立ホ長(タケ)き間ホる。自然ホ神氣一致せ(ヌ)感惑乱妄想ホ発ホ事あまだ其代(カハリ)ホ用ふる由ホて。圓子とて表裡ホ初二三四五上ホ字ホ刻(サシ)。朱と藍と(ヲ)刺(サシ)多(タ)ル十八箇作(ツク)ホて。本卦及ホ之卦ホ索(モト)ル。挙(コヽ)ら(ヌ)も。吾も用ホ門人らホも傳(ツタ)ふ。此ホ必ホ擲銭ホて有ホ。此を必ホ擲銭ホ(ヨリ)ま(ヌ)ホ灵棋ほど(ト)ホ法ホ(ヨリ)や思ひ着(ツキ)けむ。其四子と云(ヒ)ふ。或ホ(ヨリ)て窓ホ見ホる事あり。然して彼擲銭法の類をば甚く作(ツク)ホ(ヨリ)て。大功至極ホ天命を請(コ)む鬼神を驚かし奉る事ホ。児戯玩具ホ等しき所為ホて不敬倨慢の至ホり。不敬無礼ホる時ホ鬼神感格せ(ヌ)ほ。感格せざ(ヌ)ほ其卦應せ(ヌ)ほ。何の用をか為

さむ。聖人起が為ふおそ著筮の法をぞ立給ふまき。其他種々の設卦法ありと言ふども。都て取るに足ずと。門人そを遺説を記せるそ何ぞ多き事ふ。予を以て是を視まじ。四子そ思はるまき。然も更ぬり。十有八変の筮法も児戯ふ等くおそ思はるまき。然も易眼を具し誉ある是ふと此、達富及び其門人暉星ばりそ疑判断の法をも辨ずる知る多ろ人をも無くぬむ。就て案ふ。近く寛暦の頃ふ。平澤常矩ト云、ふ人ある。此人ぢ言ふ。繋辞傳ぬる十八変ぢ筮法ぞ孔子ぢ言と為れど。看來ふ変營數次かして。俄頃に辨じ難く。急卒ぢ際い学便利あらず。且註語錯乱して。聖人ぢ全文ふ非ず。疑はしき者ぬり。次ふ撰銭法。心易法。ぬう取捨ぬくを有べらず。今や年來ふそを試ふて。其一定據ふ足ざる事ぞ悟る故ふ。古法ぞ斟酌して。自己ぢ発明ぞ加ずふ別ふ一家の法ぞ立ず。惟易ぢ活法ふ契ふ。應験の過ふ犯ふ頼ふ。世ぢ易学者。或ぞ予ぢ我執犯て蜂起ふ出ぶらむ。是ふ答ふるふ詞ぞ以せず。直ふ著を立て其應験ぞ示さむと言ずと。此を其著せるト筮経験と云ふ物ふ見え多り。十有八変の筮法ふ。五十著を執て。其一策ぞ取て格ぢ中刻ふ置て虚一ふ象とて。四十九策を手ふ信せて中分して二ぢ為し。右ぢ一分ぞ格ぢ右ぢ大刻ふ置き。其中ぢ一策を取て。左ぢ小指間ふ掛け。左手ぢ一分ぞ右手ぞ以て。四々ふ揲ずふ八除して其奇策一を乾ぞし二ぞ兌とし。餘ぞ之ふ倣て是ぞ上卦とし。再總數ぞ合せて前式ぢ如く。其奇策ぞ視て下卦

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』 請求記号 848-173
ガラス使用

ざし其変爻を取ること。復綜合して。三々三々を撰て六除して奇策を數を以て。初より上爻まで六位に當て一爻変を作さむ。是世に謂ゆる畧筮法なり。此も其著はせるト筮蒙節と云ふ所と違ひ。初二三の五変にて変じと返ることなく論ずる。松井暉星が此筮法なる説に。是変爻法にて一生涯に幾千万筮を為ると雖ども。一卦ごとにて不変の卦に遇ふこと無く。故に二爻変もあり。又た三爻四爻五爻も有て。六爻皆変ずる所以なり。然るに此畧筮法は。卦ごとに必ず一爻変れば。卦ごとに二爻以上の変と云ふ者も絶て有ること無し。按ふに彼邦にて感動象數易法の取扱ひも。一爻変ずる法なりけるを。諮て鄭錢法に轉し。其を我邦に傳ふるなり。然るときは上卦より易道を変化を尚む事なる為多かれども。彼八除の法と為ること。一人の一卦を起せり。是感動易の遺法なれむかり。尋ねよく有て其法に據りて下卦より先に卦を設くる法に為多ろが。即今俗筮式なりと言へばも實に然る事に論ぢれり。

かし。抑是徒の然る筮法どもを。凡て観易の眼高からず。姫昌が僞文に欺かきて。其を批正参考せる事を知らず強ひて努めて荷ひ出せる愚法等ふて。太昊神聖に古面目ふも都て契はぬ事わきまえ。一切り掃除して。行ひ用ふる事わられ。

○再問ふ。十八変の筮法實に僞法ぁらむで。古くも史蘇君平が如き筮聖に出ぬくも非ず。然るに渠等が如く。萬変に應接せる易者に出ゐるは如何そや。予乃答むと欲ふに。傍より活田篤道あり。顧て汝ぢに答せむと言へば。篤道云く。師を右ぢ如く筮法ぢ古式を論はき在ど。ほゝ恒に我等に誨ゐて給ふる説有きむ。筮儀も然しも泥むぢじき謂あり。然る

は三千年ふ近く眞式も泯没せる故ふ。謂ゆる十有八変ふ
偽筮及ゑ擲銭を始ゑ。諸般の筮儀起れるが。其ゟ用ふる倫。
各々そゝ占判の奇中正應して。史蘇辛廖と相並ぶ𢌞徒
も。和漢古今ふ少ゝらぬも。必しも筮儀の眞偽ふ依てそ。占
判ふ淑慝あるふ非ず。幽ふ神明ゐ祐助ゐ賜はるが故ふ。偶
ふ正應有るのみ。然も有らむ。前件々々ふと師ゐ考記せら
ゝも類ゐべき。其眞式ゐかゐ見ゆる。我。古神易ゐ論む顕はに
ほと為てそ。筮儀ゐ然しも泥むなきふ非ずとて。默止ある
べきふ非ず。其由いゝゐと言ふふ。誰ふまれ。此道ゐ心ゐ潭
きぞれ。
めカを竭して熟く習慣せる人を。此道ゐ始ゑ給ゐ乃。太昊
氏一號扶桑太帝。まし並ふ立て事成し給ゐる。泰一小子一
號東華大神。及ゑ天地雷風水火山澤ゐ八神。まし天神地祇
列仙諸霊の降臨照鑒れはし坐ば。誠意ゐふ道ふ當らむ。占
判ふ正應有むそ何う疑はむ。今拳ゐる諸神の名及ゑをゐ
書あはゝふ説辨ゐらむ。抑ゝはふ至聖ゐ功徳ふとゐる事を。師の著
れしゐ見て知るべし。
易有りて。四千九百六変ゐ卦も。我が丹田方寸ゐ間ふ繋辞
をれむ。其耳目ふ觸ゐ其思慮ふ感ゐ所ふ。そゝて天下ゐ故
ゐ通じて。一些ゐそを生じ卦ゐ立ゐてゐゐ必物ゐく。疾か
ばして速ゐ。行ゑして至れむ。何ぞも筮儀ふ拘はるふ足ら
む。實ふを機ふ臨み変ふ應じて環観活用をる中ふ。筮法の
眞式は具はる事ゐり。但し已ふ篤道はゝも唯ふ此道の一隅ゐ
聞き。此文の一斑ゐ窺ゐる耳ふそ有

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

然る位域はしも九天の上を仰ぎ九淵の下に臨むが如くれまど今より後習慣年を踰え積熟功を経多らむ時を観る物や浅からむ事をみ仰ぎ窺ふ物や卑く今の臨む事を憚らぞかくそ言挙ぞふ字扉気無きど庶幾こて傍聞を憚らぞかくそ言挙ぞふれも。はて師み上に委く辨ず給ふ如く。天地の間に活きとし生ける物の。益く各々一生本命み卦あり。年々み卦あり節々み卦あり。細に推し精く求むる時を。一日一時一刻の卦さえ具足棘備して。造次も離れぞ。顚沛も去らぞ。胎合容着して火に燥あり水に湿有るが如く。皆そち性命と成る事を。即て天極に坐す太祖参神の賦與し給ふ所なりと。是で謂ある天命れる。こゝに三神の由来及び天命の本義を。我り師の諸書ふらり始めて玄の又玄。玅み又玅ある旨り著明ふ成ぎるこゝを。今も人も普ねく知れるが如し。然ぜぞ常ふ能く此天命を知ぎて其時處位り即て。能く其天命を奉じて之に率ぎ之に據りて脩て悖逆乖違せざる者を成人と云ふ。其否ばる者を小人と云ふ。是を以て大に為ことに有り。行ふ事有るに非ざれば。著筮に探頤を晝して問筮をる事を用ゐ爻て之を我が天命に求むる迷ぞ。稽疑の方備もり定ぬ。尚古み道廣る事れく儼然に存ありて違べらぞ。確乎と存て抜ぢらぞ。爭ぞる為ふ事あり行ふ事あば毎ふ問筮して以て貞正の徳を変ひ斜吝を招かむや。此を世み周易學者及び日家者流る能く知ふ所に非ざるれり。

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』 請求記号 848-173
ガラス使用

易出興也。其當殷出末世。周出盛德邪。當文王與紂之事邪。是故其辭危危者使平。易者使傾。其道甚大。百物不廢。懼以終始。其要无咎。此出謂易出道也。

此第八條は繫辭傳を採録を載せり。是謂ゆる易を周易を云ふ。三易を通じて云へふ非ざ。抑周易ゐ興へるそ。姫昌が羑里ゐ囚はれし間の擧ゐる由を。既ゐ論ふ如く諦かゐる事ゐるゐ。此文ゐかく分明ゐち玄云ほそ。何ぉる由ゐちむを言ふり。其羑里ゐ拘はれそ作れそと言ふ事。そゐ實事ゐを有ゐど。其を史遷が謂ゐる陰謀ゐ一術ゐし有れど。周ゐ文武が殷ゐ天下ゐ奪ふ就そを。陰謀術計多うそし事。史記の周本紀。殷本紀。及ゐ呂望姫旦ら世家を始ゐ。其餘の書ゐも弘く照應し考そて。赤縣太古傳。春秋命歷叙攷。三曆由来記。西籍概論ゐどゐ。稽ゐ論ゐる事見るべし。其未世ゐ至りてゐそ右ゐちゐ文籍ゐ其容説ゐ著せ。其盛れそし間ゐそ。姫昌が羑里ゐ囚はれし時ゐ作と顯ゐ言ふ事を。憚ゐる故ゐ。態とかく引ゐて放ゐめ文法ゐ以て。其作者を分明ゐらゐ如く趣ゐ云へふ。但し繫辭傳を周ゐ未世の集書ゐるふ。然る心配の文有ゐを。何ゐと思ふ人も有むゐ。其も此傳ゐ載せる説等ゐ当時ゐ傳ゐは其ゐ於中古乎作易者其有憂患邪。蓋其類其然れと書名ゐ衰世出意邪ゐど。様ゐ云へる語ども多ゐを。故是ノ文ゐ外ゐし。易之興りし周易を題せる上ゐ。殷ゐ末世周ゐ盛徳ゐる時を指し。當文王與紂之事邪と云ふ事ゐ。其作者は姫昌を除ゐて誰り有ゐむと。誰ゐも見取ゐく文ゐり。其を信ゐも。其象辭の危ゐそ

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173

ガラス使用

以ても。逆意を含める姫昌が作と著明かに知るく事かも。然るを伊藤長胤が讀易私説かに。右の語等を引ゐて。此人此言。文王也。非ず文王自言也。苟も史遷及び緯書に亦有り。其説。爻中所言。如ク王用亨ス于岐山。箕子ノ明夷。等。此ハ武王克商ニ以後之事。故ニ馬融陸績等諸儒以為。周公作爻辞。自是以来。其説一定。朱子雖ドモ知其無キ明據。亦姑ク依ル其説ニ。後世学者一ニ遵フ其説ニ。而不知其有ルヿ不可カラ詳者焉。云ふ。依て。家父の辞なる姫昌父子が作と為てを。已が憲章とする道の。臭味を見えて。其文中ふ逆意いと明かに成るが故なり。儒を以て家業を立るる人の心配てそ。実ふ然も有べき事。然らば其爻辞ふ。姫昌が逆意をはし狹めかし言むる。其は上下篇み。乾とう未済ふ至ふ六十四卦み辞ふ。一卦も其意を含まぬは無きと。其を逐一ふ論もも煩はし。今そ。尤も甚云むふ。はだ八卦の方位を錯置せふかと。其逆謀を張本ふ為むとみ結構か

是古く。連山易ふを。首とは有まじど。其を卦順を云ふ時の言ふこそ有れ。其方位を改易せふふを非ず。姫昌が易ふを。卦順を伏義の乾坤震巽坎離艮兌を用ひるまじど。其方位をしし。前條ふ云ふ如く改めしれり。いて。其由を。彼国図を検察しるふ。殷王が都を。冀州と云ふ地ふて。赤縣洲の總国ふ取てそは。丑寅巽の方位了在てそ。謂る孟津み大川てそ。東南西ふ廻て。姫昌が本国岐周の地を。雍州と云ふ域内ふて。彼總国ふ取りをはて。成亥艮の方位ふ在てそ。孟津み南ふる。豫州と云ふ辺まてそ領せり。然ふる已が領する豫雍の西南ふり。冀州の東北ふ逆せむ事は。古説ふ謂る神明之舎を犯を怖れ有り。東北の方を神明の舎と云て。古く畏み尊める事を。種々み書ふり證を引なて。赤縣太古傳ふ委しく云ふ事を今更ふ云はず。

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

かゝる世ゐ普ねく忌ミ畏るゝ。鬼門ゐ方ゐ事ゐ
挙はゐ宜はゝし非ぞと。其従類ゐ始ゐも事ゐ思ゐて。其本国
ゐ戒亥ゐ乾ゐ配し。殷地の丑寅ゐ艮ゐ配して。乾ゐ天位ゐ
り艮ゐ山ゐ厭勝ゐる義ゐ翻案して。民心ゐ安むる術計ゐ
そ有りゐ。其ゐ既済の九三ゐ。高宗伐鬼方。三年克之。小人ゐ勿
用と云ゐ。未済の九四ゐ。震用伐鬼方。三年有賞于
大国と文辞せるを以ても門ゐて丑寅ゐて。高宗とも殷代中興の主ゐて。鬼方を即鬼
方ゐ伐て。功の遅かゝりし事ゐ。其ゐ鬼ゐ代ゐ其ゐ加ゐ
ゐ。況て小人ゐ用ゐゝ事ゐ勿れと誡めゐるゐり。震用伐鬼方
云々も其ゐ義ゐて。震ゐ古方位ゐてゝ未申ゐ方ゐ在るゐ故ゐ。かく諭ゐ傳ゐし古
方向ゐ。其ゐ都ゐ未申ゐ在ゐ説ゐ。周ゐ擬方位ゐ轉語しあるゐ文ゐり。然るに旧
説ゐ。震ゐ進と釈せる説ゐ非ゐり。予ゐ見ゐる註書ども。
此鬼方ゐふ語ゐ解し得ぞて。何くれと云ふ説ゐ
有るまでゐ。都ゐて論ふゐも足らぬ説ゐりゐし。
ゐて姫昌ゐ

乾卦ゐ彖辞ゐ。乾元亨利貞と係るゐ。美里ゐ拘囚ゐ遯き
ゐ。乾位ゐ處ゐる用意ゐ詰ゐて。其文意ゐ。朱熹ゐ本義ゐ。元ゐ
大ゐ。亨ゐ通ゐ。利ゐ宜ゐ。貞ゐ正而固ゐ。文王以為乾道ゐ大通而至正
故當得大通。而必利在正固。然後可以保其終也と説ゐるゐ
如し。伊藤長胤ゐ訝ゐ。王輔嗣程伊川ゐ解ゐ。皆隋文言首章之意
之本意ゐ而千古出卓見也と云ゐ。ゐを然る言ゐり。朱子始解曰。大通而利。在正固則固得易象
ト問也。以ト貞ゐ貞ゐ以為贊と有ゐて。神ゐ贊してト問をゐし。
純固正一ゐ。其ゐ問ゐれ。従ゐ。そゐ卦象ゐ。斯て此卦ゐ象物ゐ。龍
を持重ゐる義ゐ用ふる文字ゐり。故ゐそゐ子姫旦。おゐ
あり。故ゐそゐ子姫旦。おゐ六爻ゐ辞ゐ作ゐ。龍ゐもて其
父姫昌と。兄姫發ゐ自吾と。三人ゐ履歴ゐ比喩して。其古を
示せり。其ゐ乾元亨利貞ゐ。道ゐ出ゐ用也。文王比ゐ隆

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

興始覇。鄭玄云。文王比徳於乾之隆盛。謂其龍徳長人。以始覇西方。被江漢之土也。序録著卦。科合謀序録。序王録著卦。為六十四卦經。科設王令出卦也。文王用其不倦。武發修其質素。周公用其節序。三聖首乾徳各就乾元亨利貞。毎遺夕惕若厲懼後戒。文王自朝至於日晨。不遑暇食。是乾乾之不敢有加。是乾之質素。周公制礼作楽。光文武出業。是乾乾之節序也。皆有協字。象辞と更れり。其爻辞と合せ考ふて知るべし。易のいと古き緯書云ふ書を。武英殿の叢書中に収めり。其を初九潜龍勿用とは。姫昌が時を待ちて。龍徳を用ふる事ぞを言ふ。九二見龍在田利見大人とは。六韜にある史記ぞ。文王将田。史編布卜曰。田於渭陽。将大得焉と云ふぞ。果して呂望を得たるが有る如く。呂望始めて。謂ゆる在上位大人。姫昌が顧養を受るぞを言ふ。見龍を呂望ぞ指せり。田とを田獵をぞ云ふ。史記をも合せ考ふて知るべし。古来の注はみな非れり。取用をぞ足らぬぞ。九三君子終日乾々。夕惕若厲无咎とは。序制記ぞ。文王用其不倦と云ふ如く。恒ぶ健々ぶを自彊して怠はざ。惕若ぜ恐懼を為し。時ぶか厲けきぞ事を挙ぞ。唯ぞ心構をぜし。生涯咎なくて死ぬぶ字訂ぶり。此を史記の殷本紀ぶ。西伯帰乃陰修徳行善。諸侯多背紂而往帰とあり。論衡ぶ周取殷世時。西伯滋大。紂由是稍失権重とあり。太公陰謀食ぶ児丹。教云般亡兵到牧野と有る如どぞ合せふべし。ぜて九四。或躍在淵。无咎とは。史記ぶ見えある如く。姫発が父が遺意をぞ述ぶて。三年ぶ服畢りて。後ぶ。姫昌が木主ぞ車ぶ載せて。自専ぶせざる心ぶりぞて。太子発ぜ稱

し。紂を討むと師を起し。或を躍らむと欲せまど。未天命至らざると。龍の淵に潜む如く歸ることを傳ふ。受命の元年。至て九年。而て文王卒。武王三年の服畢て。觀兵孟津。以て諸侯伐紂之心。諸侯僉同。乃ち退て以て示すに弱と云ふ。是初度の出師なり。師卦の六五が。長子帥師。弟子輿尸。貞凶と云ける義を係ふる。然て此後十有三年と云ける年ふ。再師を起して本意を遂ぐ。下の九五ふ謂ふ所是なり。九五飛龍在天。利見大人ともも。飛龍の天ふ在ふ。元時を待得て。謂ふる在下ふ大人呂望を用むて。遂ふて君王を滅して。父祖の素意を修め畢ふる。故言ふ。是を以て序制記ふ。武發修其質素と云ふ。是也。大人とも在上君王の稱ふ。後ふ。其徳ふ相似ふる在下の人をも稱ふる言を為ふ。九二の大人を姫昌をはじめ。九五の大人を呂望を指ふ。是ふて辨ふ知べし。朱熹が注ふ。九二の大人を在下之大人と為し。九五の大人を在上之大人と為

ふる。邀ふ。次ふ上九。亢龍有悔と。姫旦が上を云ふ。兄姫發が死して後ふ。其姪の成王誦と云ふし八歳の児を。補佐ふる由ふて。王事を行ふ。其位を奪はむと欲ふる。其兄弟ふ葦ふ。召公奭を始め。其意を知まる故ふ事を遂ぐ。悔を為ふる言ふ。姫旦が逆意を知ふて不安ふ思へる。忌恐ふしふと燕ふ世家ふ。魯世家ふ見通ふして知べし。姫奭あふ疑ふ人ふらむや。用九見羣龍无首吉ふは其位せし段ふ武庚。及び我が兄弟どもを誅して。我身ふ事ふ死ふしを言ふ。後終ふ其意を轉じて。文武が道を節序して爻辞を作ふり。是を以て序制記ふ。周公用其節序と云ふ。上九の亢龍を其身ふ比し。用九の群龍を。卽ち紂が子ふ武庚禄父ふど

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

小喩牙(タト)ありて坤卦の象辞小。坤元亨利貞。君子有攸往(ユクアリ)。先迷後利(アリ)。西南得朋(ニハ)。東北喪朋(ニハアラ)。安貞吉(ヤスキヲテニ)と云(ふ)ほそ。其擬方位小。坤を西南小配せる故小。此方ゐて得朋(ヲ)と云(ふ)。東北を殷都の在る方小て。鬼方ゐるゲ故小喪朋(ヲ)といふ。此卦を得て殷(オカ)し難(ガタ)くみて。貞小安(ヤスム)きそるを吉と言(ふ)ほれり。本書右の文中小。北馬之貞主。其を牝馬を坤の象物小非ず。如此(カクノゴト)き小言はば。書見の眼高(コヤタカ)からむ人を。自(オノヅ)もだかりら小知ふむ物ぞ。其も次巻筮儀の條小論ふ如く。殷世までは四十五策を用(モチ)ゐて。謂ゆる十八変筮と為(ナニ)るが。此百筮中小一筮も。容易小坤卦み出ぐ。況(イハ)ゐ有(ア)ほが故小。此卦の出ざらむ事を欲(ホッ)して。殊小巧(タクミ)なる筮法かなるを思ひ合せて。辨(ワキマ)ふべし。此事そかなか第七章り委(クワ)しく論ひ置(オキ)ぬ。此小意を唯そみ大旨そまふ云ふ(ふ)ほれり。まら是(コレ)小就て思ふ(ふ)べし。

貢復大過恒解損益夬萃巽みな象辞小利有攸往(アリテユクトコロアルニ)と云ふ(ふ)ほれり。兎剥死妄の象小。不利有攸往と云ふ(ふ)ほれり。大有・死妄・大畜・晋・損節遯姤かどの爻小も。不利有攸往と見えたり。中小も弱き利有攸往を見えたり。往利渉大川(ユケバリアリテタイセンニワタルニ)とも言ふ(ふ)ほれり。需同人蠱大畜益渙中孚みな象辞小。利有攸往利渉大川と云ふ(ふ)ほれり。訟みな象小て。不利渉大川(アリテタイセンニワタルニフリ)とも云ふ(ふ)ほれり。謙頤未濟の爻辞小も。利渉大川と言(ふ)ほれり。此をみれば殷小討入(ウチイ)る決断の識辞なるが。大川を渉る利と不利とを云(ふ)ほれる。彼都小攻至(セメイタ)るそれ。謂ゆる孟津の大川を渉(ワタ)らでそ入(イル)ゐそ能

は爻。是を以て其決断を示さむ為ぶ。此辞なかく多く出せり。柳古文を更改り。今文も恒ぶ山川を渉る誡を云ふ習ふるぶ。斯はうを大川を渉る誡めん。死てん得有まじ。利越大山。まゝ不利越大山ぶど云ふ。惜ぶ逆意の張本ぶ作き事ありるぶ。其辞の一条ぶ無文ある。然しも姦意ぶ合せて知るゝ事ぬて有りき。陸古今を学は。咽ぶる堪多る父子の兼備ぶ。けて東北巽風を定位ぶ。艮者ぶ二人も此美ぶ心着多るが冠紀を。是まゝ何ちふ兼備そ。はを配し。西北艮山の定位ぶ。乾を配せる意を。れを考ふ。

巽ぶ艮を重めきむ山風蠱ぶ卦と成る。艮ぶ乾を重必きむ。天山遯の卦ぶ成る。此をかゝ。ぶ在りる子等。及ぶ其臣属とも相謀りて。紂王ぶ美女奇物を進めて蠱惑せしめ。姫昌が罪を贖ふ。紂王甚く悦むを放還せる事を許せきて。姫昌そ。岐周ぶ帰りて陰ぶ徳を修め。是ぶ新ぶ正朔を立て。此を受命の元年ぬて云ふ。遯蠱の二卦ぶ履歴ぶ能くも符ふり。此を史記の殷周の本紀及ぶ齊魯燕ぶどの世家。まゝ尚書の太誓及ぶ上ぶ引く孔安国が傳なも参考して察ぶべし。然れだもそ遯卦の彖辞ぶ。遯亨。ぶ利貞ぬと云ぶ。蠱卦の彖辞ぶ。蠱元亨利渉大川。先甲三日。後甲三日と繋辞て。後ぶ大川を渉りて攻入ぬき。日撰をさ子ぶ示しるれ。朱熹が本義ぶ。遯卦の註ぶ。其占為君子能遯。則身雖退而道亨。ぶ小謂陰柔生小人也。と云ぶ。蠱卦ぬ注ぶ。蠱壊極而有事也。蠱壊之極。亂當復治。故其占為元亨。而利渉大

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

川。甲日出始事出端也。先甲三日、辛也後甲三日、丁也。前事過中而後事方始。然、更當致其丁寧之意、以監其前事之失。と云へる。粗其旨を得たる説なり。但し蠱卦の説も、早く鄭玄が注ふ。甲の者造作新令之日。先甲之三日。而用辛也。取改過自新之義。後之三日。而用丁也。取丁寧之義也と云へるふ據きる説なり。猶下ふこゝろふを見るべし。斯て姬旦が。此二卦の爻辞を繫ける意を承けて。毎爻ふそゝ履歴を節序して。蠱卦の初六ふ。遯尾厲勿用有攸往。子考无咎。厲終吉と云ふ。遯卦の初六ふ。幹父之蠱有ふかと言ふ。餘爻の辞も此ふ準ずて知るべし。蠱辞の意は。姬昌が羑里ふ囚はれしも。蠱ふ幹たる卦なり。然るふ其子たる者。速めて。其父を救さしめたり。及び臣下ら相ひ計りて。有子考无咎を。是なり。偖もろ厲かりと。終ふ紂をとがめずして吉なりき。はる。遯辞ふ意も。虎の尾を履めるが如き厲き所なる遯れ去る由ふて。尾厲を紂ふ譬へたり。勿用有攸往ふて。卦爻字得たるもの也。般地ふ討入るふ。用ふる事ふて誠ふ免れたる義なり。はて姬發が殷ふ攻入るふ。父が示せる日取を用ひて事を史記ふ。十二月戊午。師畢渡盟津と有ふて知るべし。此を甲ふ後ること三日。丁寧の意を致して事を始む。翼日戊ふて師を盟津を渡り畢たる也。但し一日後れたる事ふて。下ふ引く顧炎武が説ふ見えたる律歴志ふ文ふ。己日を指して。庶日を用ふる故実あるふ。思ふ合せて辨ふべし。盟津とも。孟津とも。斯て紂王と對陣して克たるを。二月甲子ふ日なりと。史記ふ載せたり。此を曲禮ふ。外事以剛日。と有る日撰ふ合ふだ。是ふ姬昌が示し遺せる日取なるべし。蠱象ふ先甲三日。後甲三日と云ふて甲日ふ中ふ取れ。朱

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

嘉が注ふ。甲日之始事之端也と云ふ。孫ふ相発して辨ふること。
呂氏春秋ふ。武王已ふ大川を渉れる時ふ。殷より膠鬲と云
ふ者を。使はして候せける。武王見て将ふ以甲子。至殷郊。子
以是報矣と云て帰らしめ。其より日夜兼行して帰らしめ。休を。軍
勢ども。疾行しめて累して甲子を休を日ふ。
殷郊ふ至ること見え。史記ふ二月甲子乃誓と有る所の註
ふ。孔安国曰。癸亥夜陳。甲子朝誓を有る由ある事を聞
えたり。○我が徒ふ栗原信充と云人あ
り。此考を視ると云ふふ。手を打ある。此も遁甲ふ日を用ゐし
物ならむと云ふふ。爭てか
労ざて。太初暦術なんどを推試ると祈と云ふむ。一ト月余を用
ゐて。其主国を厭勝せるふぞ有りける。其説長りまも此
ふ著さる。姫昌が識文いかふ畏るべき事ならばや。
革卦の象辞ふ。革。己日乃孚。元亨利貞。悔亡と云へるを。紂ふ打
克て其首を斬る日ぞ。甲子なる事を思ふ。甲子ふ素懐を
遂るとも。かゝる徳ふ。悔る云ふ如く。朱熹も本義ふ。変革
之初。人未之信。故必已日而後信。所革之悔亡也と云る如く。
其日頃ふ。悔悔る事も亡ぶむと云ふ識文なり。顧炎武が日
知録ふ。革己日乃孚。六二。己日乃革之。朱子の発讀。為戊己之己。天地之化過
中則変。故易之所貴者中。十干。則戊己為中。至於己則過中而
将変之時矣。故受之以庚。庚更也。天下之事当過中将変之時。
然後革而人信之矣。古人有以己為変改之義者。儀礼。少牢饋
食礼。日。用丁己。注。内事用柔日。必丁己者。取其令名。自丁寧自
変改旨為謹敬。而漢書律歴志亦謂。理紀於己。斂於庚。是也。
王劭謂。即日不孚。已日乃孚。以已為已事過往之已。恐未然。湯
武革命。惟有悔徳。是有悔也。天下信之。其悔亡矣と云ふ。彼易
小帖ふ。朱漢上震以先後庚申推之。当是戊己之已。此故是を
是確解と云ほも共ふ。然る訓れり思ふ合そべし。故是を
以て。此卦の象傳ふ。已日乃孚。革而信之。革而当其悔乃亡。天
地革而四時成。湯武革命。順乎天而応乎人。革之時大矣哉や
言ふ。然れど湯武が革命。あゝ順天応人の挙と云むや。實ふ

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

た天命時日に託せる。欺天逆上も挙ぐる故か。湯誓泰誓
彼どの誣言は有るべき。其を湯誓の衆庶に告る言に、甬尚
輔予一人致天之罰。甬不従誓言。予
則孥戮汝云々と云ひ、太誓も衆庶に示せる言に今予発惟共
行天罰勉哉夫子。不可再。不可三と云ひ、牧誓も今子発惟恭
行天罰。夫子最哉。甬所弗勖。其于甬躬有戮と云へるなど
見るべし。強て人を従はむるは、いとめしき事。いと諦ふるなや。斯て
偽古文仲虺之誥に、成湯放桀于南巣。惟有慙徳。曰予恐来世
以台為口実と見えるが、黙して後世おきてよ
子孫に紂王を弑して国を奪へ
進殷遺老。而問衆之所欲。復盤庚之政。を有るなる見
て。已日乃孚悔亡と云ふる象辞の意なる辨ふべし。唐国史補
に、高定貞公郢之子也。年七歳讀書至牧誓問父曰。奈何以臣
伐君。答曰。應天順人。又問曰。用命賞于祖。不用命戮于社。豈是
順人父不能對とあり。卓上第四條の引なる。通卦験に文に。
周文増通八々之節。以繫王命之瑞。興亡殊方。各有其祥と有
る語も眞實ありぬべし。是を以て知るべし。ほゝ史記の日者傳
にも。史遷が語に。自古受命王者。何嘗不以卜筮決於天命哉。
其於周尤甚と云ふに。熟く味ふべし。卜筮なり以て。受禅の天命を決
尤甚しかるし事を辨ふべし。卜筮なり以て。受禅の天命を決
禹に位を禅る所に始めて見えて。既に尚書舜典が舜
し曲礼に。卜筮者先聖王之所以使民信時日。敬鬼神畏法令
也。昕以使民決嫌疑定猶與者也と有るえ。信る古説なる我。今
周に此を甚しく用ひし故に。史遷をかく云へる。実然る説
からぞけて其象辞を。逆意を狹める危辞も多かる。其尤も
件々を抄さば。師象に。師丈人吉无咎。小畜象に。密雲不雨自
我西郊。履象に。履虎尾不咥人亨。大過象に。棟撓利有攸往亨。
坎象に。坎有孚維心亨。行有尚。明夷象に。利艱貞。節象に節亨。

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

苦節不可貞。蹇彖ニ。利西南不利東北。歸昧彖ニ。征凶无攸利ト有るなり。皆其子が殷を討む時の識文ニ作きる爻意の文辞也。郝敬が周易正解ニ。説者因大傳ニ云作易者有憂患ト。其辞危。因謂危辞多在ル爻ニ。爻辞ニ引ル商王帝乙ノ歸妹之九五。泰之六五。引ル商王帝乙ノ歸妹ノ爻辞ヲ。是文王ノ自言ノ文王ハ我師ト。孔子モ亦タ謂ル文王ハ无憂父作ル子述ト。即此ノ類也。今按ニ爻辞ニ如下随ニ云ル王用享于岐山ト。指ス文王ノ岐周ヲ也。明夷ニ云ル明夷于南狩得大首ト。指ス武王誅紂ヲ也。箕子之明夷ハ文武ヲ為ス象。帰妹之九五。泰之六五。引ル商王帝乙ハ是文王ノ自言ノ文王ハ明也。蓋ニ周公相武王ノ誅紂ヲ伐商ノ晩遭ト流言ニ憂患ニ興ル父考同故ニ摹写ス往事ヲ。眞切如シ此。後世過テ信ス班史ノ故蜀才改テ箕子之明夷ヲ為其子ト。或ハ援テ甫雅ノ釈岐山ヲ為ニ文王作ル爻辞之説ニ。牽強抑姬旦ガ周易上下篇ノ象辞ヲ作ル本懐ニ。而ノミ革命ノ有ルヲ。

中孚ニ九二ニ。鳴鶴在陰。其子和之ト云ル。如ク。長子姬發ガ志ヲ果シ。次子姬旦ガ意ヲ継ヲ。六爻ノ辞ヲ作ルヲ。是ヲ以テ姦意偽巧至ラ而モ昕カク。実ニ叛逆邪謀ノ木鐸ナリ。其事ヲ行フ時ハ。其卦爻ヲ得テ。而シテ後ニ繋ルカ。其事迹ニ非サレト。其卦爻辞ハ。姬發ガ紂ヲ克テ後ノ事迹ヲ多クハ含ム。姬旦ガ爻辞ヲ繋ル時ハ。正ニ其事有ルニハ云ハ更ニ。斯ヲ其占ヲ得ヘキ事ヲ。偽巧ハ思ヒ合ハスル事ヲ云フ。事ヲ拾ヒ集メテ爻ニ係ル事ヲ云フ。更ニ。繋辞傳ノ解ニ卦爻辞ヲ評シテ。作易者其知盜乎ト。易曰負且乘致寇至貞吝ト。

者小人之事也。乘也者君子之器也。盜思奪之矣。上慢下暴盜思伐之矣。慢藏誨盜。冶容誨淫。易曰負且乘致寇至盜之招也ト云ヘル。是ヲ思フニ。彼周易上下篇ヲモ。

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

誨盜誨淫なみ尓非ら爻。謀叛弑逆の誨爻を殊尓そゑ要旨
ゐ爻を有りげる。其もかゑみ日者傳ゐる司馬季主が語ふ伏羲作リ
八卦。周文王、演二三百八十四爻一。越王勾踐、倣二文王一
八卦一。以テ破リ敵国一覇二天下一。と有るを然る言ふて。此勾踐が呉尓
囚ゑまて。呉王が糞を嘗め。国ゑり美女財宝を贈らゐるを
其心を取爻遂尓赦さまて帰ゑるる後尓。兵を起して呉を亡ぼ
せる事の。能くも姫昌を倣ゑるなるべし。故是を以て
彼蒙莊も。聖人死ばきまで。大盜止ばと爻言ふる。其もかゑみ成
湯及ゑ姫昌父子らが類尓ゐる。擬聖なゐを言ふ。豈眞聖ならし
も然云ふはむや。然れを彼国みなぞ。王紘ろ定位ゐ爻国尓を。然も有
らむ有ほ度し。皇紘無窮尓續かせ給ふ。君々ゐり臣々ゐる。
皇国み人ゑその。信し讀べき書ゐを非爻。皇国み人ゑしても。
此を能く信じ倣ゑるを。北條義時ゐ至ゑ。然るを永久の
尓非爻ととゝ。湯武が革命のわげらる口実としても。天皇尓
敵對し奉ゑ。畏くも克參らまても。三柱の天皇を嗚尓放らし
奉まゐる是ゐり。何尓恐
るべき事ゐらむや。はてゝ本文の危者使平。易者使傾云こ
ゝを。彼上下篇の辞を常み占判尓用ふほ意定を云ほふて。
其辞み危険ゐる故爻。平易ゐるなし。平易ゐるなむ。傾覆せ
しめ用ふる時爻。其道甚大尓ゐ。百物まゝ廃闕尓く。衆事悉
く備はるを。殊尓戒懼を存して終始をゝむ。其要咎ゐ爻ふ
歸を。此周易み道爻と爻。今し倩倖の徒の。強むて誇言し
て。季王君平尓比ゐと称し。十有八変の筮竹を賣爻て。糊口み料ゐ
然して此易法を用ゐ事も。敢て咎ゐき事尓ゐて。然きど
彼六爻占を。十有八変み手術ゐ爻事々しき事きを。實尓を俗尓
畧筮とて。著を揲ふほふ尓。八を以て内外卦を立て。また六
を以て著を揲爻て。変爻を立爻易法尓類ゐる拙法尓そ有り

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

乃当(アテラ)冗笑(ワラ)しや。

大壑 平篤胤撰述 門人 駿河國 新庄道雄 同 武藏國 碧川好尚 校 常陸國 竹来道彦

九 孔子晩(ニシテ)而喜易(ヲ)序(ツヽ)彖繫象説卦文言讀易(ヲ)韋編三絶(シテ)曰(ク)假(シテ)我數年(ヲ)若(クハヾ)是(ノ)我於(テ)易(ニ)則(チ)彬彬(ヒンヒン)矣(ン)。

此第九條(ヂヤウ)を。史記(シキ)の孔子世家(ケ)から採(トリ)たり。抑(ソモ〳〵)孔子(ノ)の晩(シテ)而喜易(ヲ)序(ツヽ)云(フ)説(トキ)を。儒者(ジユシヤ)の嫌(キラ)ふ事(コト)ありきなど。信(ゲ)かに然有(アリ)しとし事(コト)ん。種(クサ〴〵)々思(オモ)ひ合(アハ)せ考(カンガ)へ事(コト)實(ジツ)も有(ア)り。其(ソ)を先(マヅ)初(ハジメ)として好(コヽロヨ)く覺(サト)る。禮容(レイヨウ)の事(コト)字問(ジモン)はむと。周(アマネ)く適(ユキ)て老子(ラウシ)の門(モン)に入(イリ)るは莊子(サウジ)天運(テンウン)篇

ふ。孔子行年五十一。而見老聃ヲ有ふ時ト。孔子の老子ふ入門せる年頃ヲ。或ハ十七歳の時と云ふ説ミ有ふ。依テ史記の索隠ふ孔子適ノ周ニ訪ノ礼ヲ之時豈挂ノ十七ノ之難行也。此非ス十七之人語也。乃既ニ仕ノ後ノ言ヒ耳と云ヘるを信ズ。然ル訛リ。史記の老子傳ふ。其時ノ事ヲ載シテ。老子曰ク。子ガ所言ノ其人與骨皆已朽矣。獨其言在ル耳。去ラ子之驕氣與多欲。態色與淫志。是皆無益於子ノ之身。吾所以告子ニ若是而已ヲ誨ふるふ。孔子甚ク畏感ル事あるが。葛洪神仙傳ふ。其事ヲ記せる次ふ。孔子讀書。老子見而問之曰。何書。曰易也。聖人亦讀之乎。老子曰。聖人讀之可也。汝曷為讀之ヲと。孔子曰。吾聞ク。老子の易ヲ讀ムあとヲ叱ラるヲ得悟ル所ふ非ず。聖人の徒ふ有ふ時ト。易道ヲ深理ヲ。汝如ヲ驕気態色の態と憤セしめ。加ノ彰其驕気ヲ抑子むその教術ぞ。然ル

後ふて。其旨ヲ云ヒ誨せラるゝ。そは礼記ふ家語ふ。老子ふ聞ル由ふて。孔子ノ易理ヲ語ル事ル。往々所見ル有ル知ル。ふ。論語ふ孔子ノ自語ふ。加ノ我數年ヲ五十以學易ヲ可以無大過矣と云ヘる事あふ。五十未滿の。いまゞ易ノ義理ふ。能ク會得せざる頃ノ語ル。思ヒ合せて。所知ル。伊藤長胤が讀易私説ふ。孔子以ノ筮理ヲ説易ノ論と云ふ條あリて。此ノ語ヲ引ヲて。故知ル。孔子之言ヒ易ヲ不以ノ為ト筮之書ヲ而以ノ為ス筮理之書ヲ。儻使之ト筮之書ヲ而以ノ為ス筮理之書ヲ。固不待ノ假ノ數年ノ而学也。蓋日中則昃。月盈則虧。此理ノ之常也。故易之為教。貴謙沖ヲ而戒盈滿ヲ。喜中正ヲ而忌亢極。所以謂之学也。然ル當時未甚ク盛行ス。況ヤ詩書執礼之可雅言ヒ也。故假之數年ヲ領會其教。則應事接物。豈有悔尤之至。此所以為無大過也。然ル今日為易者。當據夫子ノ言ヒ。以ノ為筮理之書ヲ可ノ矣と云ヒ。此ヲ通解の首ふる説ル。記せるが諾ふる説ル。斯ヲ同書ふ。五十而知天命ヲと云ヘるを。次々ふ上達せる事ヲ云ヒて。十有五歳ヲ學ふ志しヲ。次々ふ上達せる事ヲ云ヒて。五十而知天命ヲと云ヘるを。此齢

ふして創めて易を学ぶ。其易学ぶ力ふ頼アテて。天命を知ル
ル義ありるよりて著シ。其を本編ノ記ル如く。天命を知ルと。易
學の本旨多ク此ニ在リ。此語の鮮を。朱熹し能く。天命ノ即チ天道
之故也。知ル此ニ則チ極メ其精ニ而不感ズ物ニ者乃事物ノ所以当然
又不足言ニ矣と云ふるが如し。感ズまず易緯坤鑿度ふ。孔子魯
人生不知易ニ。偶筮其命ヲ得旅請益於商瞿氏ニ。曰子有聖智ニ而無
位。孔子泣而曰。天也。命也。鳳鳥不来河無図ニ至ル。嗚呼天命之也ト。
嘆ジテ訖而後停讀禮。止史削ル五十究易作十翼也ヲ言ヒ。其易法
も。師於姫昌ニ。法旦とも見えあり。此全書を。武英殿の聚珍板
ありて云ふ如く。晩ク世ふ顕はれ出し。首ノ提要
と云ふ此説を始メ。古説と思ふる。條々も少かりず。偶筮其命ヲ
ぞは。人各々本命行年ヲ天命を定ルるる。偶ふ時命の変を
知ル為ふ筮を立ルる義ありるよと。既ふ本編ふ委曲せるを
考ヘ合せべし。抑旅卦を。所住ヲ去ヲ處ルる羈旅の象ありて。
其好ム禮樂はも。聖智あるとも位无さ。東西南北の人ふて
も行ヒ得ルはしき道ありる由ヲ。商瞿ふ問ふて之ヲ解ヲ。其天
命ヲ何とも為ルらぬ事ヲ嘆じて。其ヲ見を改めて。禮
書を讀ふ止ルる停廃し。春秋ヲ史削ふ止まり。五十ヲ齢ふし
て。始めて易ヲ究ヲ十翼を作ルる由ありて。然ぞ史記自
序ふ。孔子曰。我欲載之空言ニ不如見之行事之深切著明也ト。有ヲ史削ふ
就ル云ふる語。おゝ説苑ふ。孔子曰。成人之行達乎情性之理ニ通
乎物類之変ニ知幽明之故ニ睹遊気之源ニ若此而可謂成人ト。既知
天道行躬以仁義礼楽飾身以礼楽夫仁義礼楽ハ成人之行也。窮神
知化ル徳之盛ナリ也ト有ル。易学ふ就ルての語ありるべし。然ぞなお
ふ。此も共ふ五十而知天命ヲ

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173

ガラス使用

を毎ふ晉ぎて．其，旨い と高尚ふ聞えるゐき・十翼ぢて本文ふ。序ッ彖繫象説卦文言，とある。彖傳上下。繫辞上下。象傳上下。説卦文言の八傳ふ。序卦雜卦の二篇ふ加ゑて十翼と云ふ。史記ふも序卦雜卦ふ名ヲ漏せり。序ッとて。孔子以前ヶり在りる。右の傳等を摭ひ聚め。序次ヲ立て十傳と為ゐる由ゐり。漢書藝文志ふ。易経十二篇と有る師古ふ注ふ。上下経及ヒ十翼。故十二篇者上彖一下彖二上象三下象四。上繫五下繫六。文言七説卦八。序卦九雜卦十とあり。此を然ろ言ふきど。楊雄曰。宓犧氏縣絡天地。経ニ以テ八卦ヲ。文王附ニ六爻ヲ。孔子錯ニ其象ヲ。而彖ス其辞ヲ。と云へる文王以下の然ろふ隋志ふ。孔子為ニ彖象繫辞。文言序卦。説説を非ゐり。然ろど漢以来誰も。十翼を孔子ふ自作と云ざる卦雜卦ヲと記し。今ふ坤鑿度ふも孔子作ニ十翼ヲ一と云ひ。諸書ふ十翼ふ文を引用そるふ。孔子曰ゐと云ふを。悉誤ゐり。序ッとて云へ。

云へ。孰ヶ豈うち任せて作ヲと云むや。然ろど漢以来誰も。十翼を孔子ふ自作と云ざる子問と。伊藤長胤が讀易私説とゐり然きど其まゝ未尽さ下ふ論ふを見るきし。其を備ちり序次を為むと喜ふ讀めゐ。韋編を三まき絶損ぢて心ふ應ふ如く。序を為得ざ故ふ。ふ未我ふ數年ふ假ありて。是ふ若く勞ひ。我が易學ふ於て彬々多ちも。意ふ快からめ由ふ嘆きし孔子の場を叙ぢるふ甚く労せる事も。論語緯北考識ふも。孔子讀易韋編三絶。鉄撻三折。漆書三滅ともゑゑゐり。史記の文を是ふ依きるゐらむ。仍て上ふ揔ぢて坤鑿度ふ。孔子ふ易学も。姫昌を師ヶし。姫旦ふ法とぼ。ヶ有ゐふ就て思ふ。尚書ふ孔安国が序ふ。古者伏犧氏之王ニ天下ヲ一也。始畫ニ八卦ヲ一。八卦之説謂ニ之ヲ一八索ヲ一。

求其義也。先君孔子生於周末。讀易道以黽勉。索而有ふ八索も。本編ふ云へる如く。本命行年ふ八卦。各々年々ふ八索にして。八々六十四卦と成る。そふ六十四卦。まゐ毎年ふ八節ふ変化して。六十有四ふ成る古法なり。そは此文の正義ふ。以易八十四爻。皆出於八卦。就八卦。八卦為主。六十四卦三百八十四爻。皆出於八卦。就八卦。求其理。則萬有一千五百二十策天下之事得。故謂之索。非一索再索而已とあるふても知はし。然るに孔子かふ姫昌父子が。六爻判断ふ周易を讃して。八索ふ古法なむ廃黙せる由なれり。其を論語ふ。信して古へを好むと言へる語を有れど。其性元より古道な好まば。常道な好む学僻なまで。此を学ふはじき非事ふさそ。かく言ふを不審み思はむ人を。後ふはて其序次ありと云ふ十翼の中ふ。彖傳上下も。姫旦が爻辞ふ傳へる。其彖爻の辞ふも。採用をはぐれた上を。況て其傳を云ふ。水更なまど。彼彖傳を實ふ孔子の自作ふやと思ふ由あま。其を天哉乾元萬物資始。乃ち様の讃語多へど。讃易道と有添ふ叶ふ。かゐ湯武ふ擬聖ふ。善な誣ある説ふ有ふが。此人の学風ふ合ふ。ゐ華卦ふ傳ふ。渠らが君を放ちし。君を弑せし事をし。順と天應へ人と云へる類を云ふ。ゐお論語を始め諸書ふ。此人の成湯文武らぞ。猶不審くて後ふ問ふ答ふべし。次ふ象傳上下。是ゐ多彖傳と同日気ふ添へ。孔子ふ作れるぢく。斯思ふる中ふ。大象とて乾ふ天行健君子以自彊不息と云へ。坤ふ地勢坤

君子以厚徳載物と云ふ類の六十四章を疑ひ太昊氏以来の象辞を轉傳ㇾ誦し来れる我いにしへ古昔世ふ筆記せるふ物ㇾ有り。其を姫昌が象辞の危厲ㇾ有ることを。似も着ㇾ温雅諦ㇾ文ㇾ而。法象を云ひあらはし易簡ふして。其趣意の善く通ふ。謎を解くが如き類ㇾ有ることを。質直平和の文ㇾ有ㇾ以て。古象辞の遺訓ㇾ有ることを先所知ㇾ有り。いづく其由はよ。抑彼六十四章を大象と云ふを一卦ㇾ大象ㇾ有ㇾ云ふ文ㇾ有ㇾ故の名ㇾ有ㇾ。来いかにぞ誓ふ法ふ。姫昌ㇾ加ㇾ彖辞ㇾ作ㇾ而。卦を下ふ載し姫旦ㇾ加ㇾ爻辞ㇾ作きる後を。其周易ㇾ用ㇾ故ふ大象の辞の古ㇾ有ㇾ自然ふ廃ㇾ有ㇾ。孔子ㇾ象傳上下篇ㇾ作ㇾ時しも。其を惜みて彼象傳の毎首章ふ標し出せる物ㇾ見えㇾ有り。然ㇾ彼象傳は也。爻辞ㇾ釈せる傳ㇾ有ㇾ其首章ふ標出せる大象の名ㇾ聞ㇾ有ㇾ故ふ。隷せる大象の文ㇾ思ㇾ合ㇾ有ㇾ。然らず此大象の。孔子以前ふ在ㇾ古文ㇾ有ㇾ以て知ㇾ言ふ。春秋昭公が二年ㇾ左傳ふ。晋ㇾ韓宣子が魯ふ来聘せる時ㇾ事ㇾ載して。観書於大史氏見易象曰。吾乃知周公之徳與周之所以王也と有ㇾ易象ㇾ乃ち大象ㇾ文を見ㇾ義ㇾ有て。今ㇾ謂ㇾ姫旦ㇾ爻辞及其傳を謂ふ。吾乃知周公之徳與周之所以王也と云ふ。大象辞の温柔ふして危厲ㇾ有らざる義ふ。以て。周の王ㇾ有る所以を知ㇾ有ㇾ。然ㇾ彼伊藤長胤ㇾ周易通解ㇾ有も。今と相似ㇾ有る説ㇾ出し

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

て。右の左傳を引き。孔子時年十歳。象之作蓋在孔子之先矣。
と云ふを信然る説なり。先儒以後の。其讀易私説を見まえ。
子所観象者為指文辞。然文辞之流行于諸国久矣。列国士大
夫皆能言之。載在左氏傳。晋献公嫁伯姫于秦。史蘇占之。引帰
妹之辞。僖十五年秦卜偃筮。秦伯将納王。曰公用享于天
子之卦也。襄二十五年。齊崔武子筮取棠姜。陳文子引困之
石。拠于蒺藜。之辞。可見文辞於諸国久矣。何得謂到孔子
宣子始観之哉と云ふなり。是も通えざる説なり。然らば此
大象辞かの周易あるとし後の物かを言ふ。夫より遥ふ以
前の物なり。其を何ぞ以て云ふなるまで。本編を註せる如く。象
字をと南越の大獣を名ふるなり。想像の義を假借せるあて。
八卦を作る當昔遠うも世より。用けむと所思を原文
字ふまで象は然らず。此を疑ふく姫昌が。其作まる卦辞
名ふ。始めて假まる名ぞ聞えざりき。然云ふ由も。有ある古書
とも外ふ。形容ふ擬そる事ありどもと無なを。象字も今ふ至るまで。普ねく形容ふ義ふ用ゐ
来まる以てるも辨ふ及きれり。抑象字を説文ふ馬象延也从尸从象省。韻
會ふ徐曰象形。繫辞曰。象者材也謂卦中剛柔之材。陸氏曰。象
者斷也。毛氏曰。从尸彔頭也。象其鋭而上見と見え。楊慎が外
集ふ彖ぶ曰第犀。狀如犀而小角。善知吉凶。父廣有之。土人名テ
曰稀神犀形獨角。知幾知祥。是則象者取其幾也と言ふり。ま
留青日札ふ。彖者修豪之獣。象類也。頭鋭而上見。故象居卦之
首。彖走斷然不疑。故象能決斷下卦之體。或曰。彖名第犀。形
小獨角。善知吉凶。故曰稀。是等ふ説ふ依りだ。旧来ふ大象ふ。
神出于南荒と言ふり。是等ふ説ふ依りだ。旧来ふ大象ふ。
象字を假借せるふり思ふ著て。此獣の名を借まて。己が新

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

作せる。辞ある名ありを為ある例り。然れど假令象と名けあるも。語はその革きそを卦徳の大體を云ばれ。即象辞例るが故か。繫辞傳かはさ。彖者言乎象者也とも見えあり。是何か大象が彖辞より古記明證からぞや。長亂が通解か。先子謂彖別就テ上下二象ニ取義ル。如天行健地勢坤。然則象之作其右ニ。深く右の謂を思はさる例り。然らば大象を。殷世の辞ふるかりを言ふか。尚夫よりも以前が物例り。其を何を以つて云例きむだ。殷か用ひある歸藏易の卦名を。既か云ふ如く。今が卦名ぞも大抵異例きを。大象辞れし殷世か記さむかも。其卦名を用ふるやふか。然らぬも決めて夏の上の第四條か引ある路史の説か。連山之文ハ尚代之作。歸藏之文湯代之作。周易之文ハ文王之作と有我も思ひ合をべし。其を夏か用ひある連山易を。今が卦名と全し或は后とも先王とふ。稱せはを以て。疑ひなく夏世の筆記推量らるるを。大象の文。凡そ六十有四章が中か。七章も称して一章を大人と称せるが。其餘の五十四章。もそ君例君子以云々云子を。是を以て其世を量例り。然るを君子と云ひ大人ぞ云ふも。赤縣太古傳か云ふ如く。皇国が故實ぞり起りて。大昊氏が當昔をを。王庶の通稱か云む効ありて言例きむ。大象辞が口授かをし間も。君子ぞも大人ぞも誦し傳ふりむを。夏世を後か。先王后例ど云ふ語をも交

子ゝ傳子かも。大象辞の古く口授ふて傳子けむ事も。既ふ引ける乾鑿度ふ伏羲氏始て作八卦。質者先文。以て天言。此易之意と有ふを始。さる意はへの。見えるるおて知るせし。其を彼大象の先王以云ふ有ふ事業とともを視るふ。多くを夏禹以前ゝ王者の履歴ふ合ゝるを以て。夏世の筆記ふ疑無しとは言ふ。其先王と稱せる條そも。先王以建萬国親諸侯。先王以配祖考。先王以省方観民設教。先王以明罰勅法。先王以至日閉関商旅不行。先王以茂對時育萬物。先王以享于帝立廟ふと見え。后と称せる條々も。后以左右民。后以施命誥四方。后以裁成天地之道。輔相天地之宜。以上皆禹王以前の王者の事業ふ係る辞等ゝり。偖君子以云く。ぞ有ふ五十四ゝど見え大人と云ふを。大人以継明照于四方と見えを。此を皆禹王以前の王者の君子以云く。ぞ有ふ五十四章を視るふ。ぞ彼王侯ふ渉る訓誡かるが。引伸しては。成人の学ふ志を立ふ。士庶ふも用ふばき辞等ゝり。是ふ因まて思ふふ。孔子晩ゝ易を學ふ。ぞて後も。能くゝ彼大象を観し。熟く其辞を玩ぶて。其雅の言行ふも。此辞ふ本ゐはし事著ゝめ。抑君子といふ語も。そと右の如く重ね語ふる字。孔子の雅ゝ大象ふ本ゐおて士庶を訓ふる。君子ふ比ゝ子て語を成せる後終ふ

友講習と有るふ本ぢゐる語ゐり。然るを兌を恒ふ悦懌を学ぶ主と為る卦ふるふ效こて。学びて時ふ之な習ふを悦こと。其学ふらりて。学友ふり遠方より訪来て。講習を為を朋も有るふ。此ゐり。又然しも遠方より訪来て。講習を為を朋も有るふ。此学ぶ尊ぶ事を都てこも知らぬぞ。我を知る人無さを慍悶せざるも。亦君子ふ不ら免やと。兌卦の象を観し。其辞を玩ぶこと。自ふ夕寓意せる語ゐり。見む人心を潜めて思ふべき孔仁と云ふも。乾坤二卦の大象ふり。説出ある物ゐり。是ふ此を始免と為て。論語中ふあは信ふも言ふ得ると云ふ。五十以学易可以無大過矣と云む。晩ふして易を喜み。思ふる語ごとも。熟視れむ大象ふ辞を敷演し。或も翻案して云ふ物を著はして。其毎章ふ引出るを見るつし。斯ふ半ふを過なて。かゐ一以貫之と稱し。その第一義を立て第二十堯曰篇の終章ゐる。不知命無以君子也と云ふ語章編を三絶し。鐵撾ふ三折せりと云ふ説の實然る言ゐふ

な思ふ乃つし。論語中ゐる孔子の語ども。大象の辞を敷演翻案せるが多かる由を。冷逐一ふ諭さむと。最易き事ふも有きど。昕狹く煩け迷む。卿ふ古易大象傳と斯云ふ物を著はして。其毎章の注ふ引出るを見るつし。斯て第二十堯曰篇の終章ゐる。不知命無以君子也と云ふ語た。澤水困ゐ大象ふ。澤无水困君子以致命遂志と有るふ本ゐけふ語ふて。知命を易學ふ第一義ゐり。其をかゐ陳蔡ふ間ふ困厄せる時の様ふて。此時しも子路ゐ慍見ず有やと問ふるふ。君子固ゐりと云へる語を思ふべし。既ふ知べし。此時しも子路ゐ慍見て。君子も亦窮そるは時ふ琴を鳴し歌ふを在ましも。小人窮そるきぐ是ふ溢命を致免。五十ふして天命を知きる驗ふぞ有ゐる。然るふ此語を終章ふ出し。首章ふ免澤ゐ大象ふ據ゐる講習ふ語を出せるも。道を學ぶと。講習ふ始ゐりて。知命ふ終る義

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

ま明せるふて。論語の撰者を誰と知ら祇ど。能く孔子の
志学より成学まで。窺ひ識る撰者なりと。論語の撰
曽参らが門人の撰と云ふ。或は凶損の弟子の撰
と云ふ。猶くはぐの説等あれど。皆詳ならず説等かと。はて
論語ぞ語とも。多く大象の辞か。本説りと言ふ事を。古
今の学者の知ぶる事ぞ。始めて言ひ出もぞ。今
忽ち諾ふ人を有はじく。却て大象辞と。
論語ぞ相似るとて。共ふ孔子の語かる故説りと言ふも有
む。然れど其説立がて。由あり。其を彖辞文辞も。姫昌父
子の作ふて。互ふ異義なく。其を釈せる彖傳象傳も。共ふ孔
子の作ふて。本辞と其義の違はじく。唯かる大象辞の

み。彖文の辞及び其傳と義理の相違せるが多かはた。是の
ま古辞ふる明證ならずや。今ぞは相背ける事をし。二ツ云
君子以厚下安民と有まじ。是安重の卦の大象ふ。山附於地剥
也柔変剛也不利有攸往と有まじ。是安重の卦なり。彖辞ふも剥なり
大象ふ。上天下沢履。君子以辨上下定民志と有まて。吉卦ふ非ぞ。ふく履卦の
を説るふ。彖辞ふて履柔履剛也と云ふまじ。危厲の虞あ
る卦なり。此條ふ象と象と。其旨の異ある。今尽く挙ふ暇
ぬる文。かゝる彖辞文辞を更なり。其彖傳文傳と共ふ。吉凶相
関せる。ふ大象の六十四章。これ之を人事ふ推て。教ふるふ
善道を以し一も不善ふ渉る者なさを。是ぬら周易ふ関かる
事も。はるかいと諦なるふ非ぞや
斯て後ふ顧炎武が日知
録を見まぞ。其一巻ふ。孔子論易見於論語者二章而已曰加
我数年五十以学易可以無大過矣曰南人有言曰人而無恒。
不可以作巫医善夫不恒其徳或承之羞子曰不占而已矣。文

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

意を人として恒の心あるもの言へるを・信然る言ありて・其も恒の卦の九四の辞ぶ・其徳を恒ふせざる者を・或もそれが羞を承くと云へるを・証して・記者於恒の心ある者を占はさらむ而已を誡めるなり・記者於天子学易之言・而即継之曰・子昕雅言詩書執礼皆雅言也・是知孔子平日不言易而其言詩書執礼之常・而不越焉・則自天祐之吉无不利矣・大象昕言・凡其体之自施之於政者・無非用易之事・以上の説と心・古今ふ人の云ざる事ふ・孔子の作て・信ず然る言ありて・此より以下も・繋辞傳を直ふ説なり・儲是と思ふのみ非ずそ・其餘も多く理まれる説なり・儲是ふ就て案ふふ・論語ふ其門人らが言ふ・夫子之文章可得聞也・まる子罕言利与命与仁ふど有ふも・皆易道の深理ふ渉る事ふ聞えなり・故故其作繋辞傳於悔吝无咎之旨ふ特諄々焉然辞本於象・故曰君子居則観其象而玩其辞観之者浅玩之者深矣其昕以與民同患者必於辞焉著之故曰聖人之情見乎辞・又曰出入以度外内使知懼又明於憂患与是孔子之易也ぞ云ふを・予が意を得る説なきぞ・今の要ある語どもを抜そを抄して・私説ふどふ・贅ふ魯論昕載子昕雅言詩書執礼・乃曰興於詩立於礼成於学・此夫子平日昕為教者也・其言及于易者僅有可以無大過之言上耳・又且曰加我数年・則其事似緩・観十翼昕言易之於人道極其深奥極其功近不可斯須離非詩書之可比・此其旨不同・吾寧捨繋辞而従論語と云ふを・論語を宇宙第一之書と思ふ為ふ故ふきぞ・顧笑して・其父ふ言ふ従ふを・生涯の意と為ふ故ふきぞ・生涯の意と為ふ故ふきぞ・顧笑して・其父ふ言ふ従ふを

无咎云々。歐陽脩が周易童子問と云ふ物ふ。童子問曰。係辞非聖人之作乎。曰何獨係辞焉文言説卦而下。皆非聖人之作。而衆説淆乱。亦非一人之言也。昔之学易者。雑取以資其講説。而説非一家。是以或同或異。或是或非。然其傳已久矣。故雖有明智之士。或貪其雑博之辞。溺其富麗之辞。莫得究其所従来。而叅其眞偽。と言ひて。ほゞ其繁を乾の初九ふ。潜龍勿用と有ふて足る歟。同傳ふ。易簡之善配至徳云々。或も夫乾確然示人易矣。坤隤然示人簡矣云々。ほゞ夫乾天下之至健也云々と。其三も同傳ふ。六爻之動三極之道也と云るふて足るなほゞ易之為書也有天道有人道有地道兼三才而両之云々と云ひ。まゝ説卦ふも同じ。其四も係辞ふ聖人設卦観象係辞焉而明吉凶云々と有ふて足るなり。

同傳ふほゞ辨吉凶者存乎辞。まゝ係辞も易に有四象。所以示也。係辞焉以尽情偽。係辞焉以尽其言云々有ふ抔ゝ挙ぐるなり。而大旨則同者。不可以勝挙也。謂其説出於諸家。而昔之人雑取以釈経。故擇之不精。則不足怪也。謂其説出於一人。則是繁衍叢脞之言也。其遂以為聖人之作。則又大繆矣と言ひて。次ゝ無戻相容ざる説等も。殊ふ多が中ふも。実ふ能く論じ得ざる説も。無き抔ふ非抔ど。論じ得ある説も。今し其文を引き出ぜゞれば。斯て其下ふ係辞者。漢初謂之易大傳也。至後漢已為係辞矣。謂之聖人之作。則僭偽之書也。蓋夫使学者知大傳為諸儒之作。而敢取其是而捨其非。則三代之未。去聖未遠。老師名家之世学。長者先生之餘論。雑於其

間者在焉。未必无益於学也。と云へるも信然り言なり。此文ふ
を、漢和ふ易大傳ぐ謂ふぐ云へるを、史記ふ自序ふ、易大傳ぐ天
下一致、而百慮同歸、而殊途ぐと有ふ正義ふ張晏云ふ、謂易繫辞
也、と云ふ説ふ擬りてくかく言ぐり、経典釈文ふも、大史公論ぐ
六家要旨ぐ引ぐ此文ぐ謂ぐ之易大傳、班固謂ふ孔子晩而好易、讀之韋
編三絶、而為之傳、傳即十翼也、と云へる、前漢郊祀志ふ、刘向が
語ふ、易大傳ぐ曰ふ、誣神者、殃及ぐ三世、と云へる語も有り、然れども此
言加ぐ杯ぐして。世ふ傳ぐ子ぐし物なり。是を以てく其文中ふ。顔氏、
之子ぬど言ぐ。子曰ぐ云へふ修々も多かぐ。然れど繫辞傳も。
元ぐり其新古ぐ取舎ぬくくぐ叶はぬ書なり。讀易私説ふ、系
辞曰、顔氏之子、其殆庶幾乎、有ぶ不善未ぐ嘗不知、知之未ぐ嘗復行也、此非孔子之
言也、礼父前子名、君前臣名、弟子之於師亦然、故夫子之呼諸
弟子、必称ぐ其名ぐ曰、参乎、回也、由也、賜也、而未ぐ嘗称ぐ其字ぐ、亦未ぐ嘗ぐ称ぐ
某氏之子、若使ぐ系辞為ぐ夫子之作耶、必不称顔氏之子、史記載
孔子之言曰、顔氏之子使ぐ甫多財、吾為甬宰者、亦依ぐ系辞附會ぐ
其称ぐ焉耳、不足ぐ據也、且翼易而称ぐ其門人之徳ぐ九可ぐ疑也、蓋戦
国儒者習聞顔子之徳、牽合ぐ附會ぐ、不遠復之美ぐ耳と云ぐ、通解ぬ釈例ふ、十翼之興、或先於孔子、
或後於孔子、後世湊合ぐ以附ぐ経耳とも言ぐり、実ふ此説等ぬ
如く、繫辞文言ぐと、若孔子ぬ精撰ぐらむふ、自語ふ子曰と
云ぐ、ぬくく非ぐ、是を以てく説者或も、此を講師の言ぐし、或も
子も男子の通称ふまでぐ何人を指とも、詳ぐらぐ抔も云ふ
ぬり、黙まりと其を上件の謂を思ざる非説ぬり次ふ文言傳も。長胤も云へふ如く。首

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

章の元者善之長也ならむ。故曰乾元亨利貞と云はで六四字ぬ。左傳称る穆姜が語称む。斯て爻辞を解し畢る後か。乾元者始而亨者也云々。雲行雨施天下平也ぞ云ふ六十六字あり。此も象辞と同旨称るみそ。本より文言首章の錯簡称む。是を以つて元者善之長也の章と其旨自ら相牉せり。然れど元者善之長也と云ふ首章も後来の挽入称るは明けし。歐陽脩が童子問ぬも。早く首章の元者善之長也。と云ふ文を挙つて。此穆姜之語。在襄公之九年。後十有五年。而孔子始生又數十年而始贊易。然へ則四徳非乾之徳。文言不為孔子之言矣と云へるも然る言称ながら。委しからず。まつ是ふらむと思ふか。此も三易有つとし以来の古説ぞ。孔子の集記せるが中ぬ。後来まで其門葉の徒かぞ。孔子の遺説ぬ。左傳中の語なるも。加子て。撰次せる物ぬる事疑称し。然まも童子問ぬ首章の元者善之長也云々の語を以て。文言を一向ぬ孔子以前の物と云へる説て委しからず。まつ同書或謂左氏之傳春秋也。竊取孔子文言。以附穆姜之説。是左氏之過也。然乎曰。不然。彼左氏者胡為而傳春秋。豈不欲其書之信於世也。乃以孔子晩而所著之書。為孔子未生之前之説也。此雖甚愚者之不為也云々とも言ふ方ぞ。此説を能く叶ふ次ぬ説卦傳ぞ。隋ぬ經籍志ぬ。秦焚書周易獨以卜筮得存。唯失説卦三篇。後河内女子得之ぞ有れど。今唯一篇あり。其ぞら玉碟相半して。全篇そ伝ふる用ぞ難き物称ぬ。清の黄小帖ぬ説卦在漢時已亡。至孝宣時。河内女子発老屋。得之。至後漢荀爽集解。又得之。則皆逸礼也。此非可意造者。故朱氏本義已補入。今諸家所傳。荀氏集解ぬ説卦傳下と云へるも思ひ合せべし。其採用そ

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

き條々は。昔者聖人之作レ易也と云ふ二章。天地定位の章。雷以レ動レ之の章。乾健也坤順也の章。乾天也故称レ父の章なども。此六章の中ふも。天地定位の一章も。眞の古説ふて。金科玉條ふも比をべき物ぞ。其餘の數章をみれば蕪雜猥瑣ふるが中ふ。帝出レ乎震云々の章も。既り云ふ如く。姫昌が偽方位の説ふきむ。故曰成レ言乎艮と云ふて。一切な掃除みたい。餘も訂正補綴を加ふて。擇ぶ用ふべき事も無ふなら。朱熹が本義ふ。此篇の為王と云へるより。兌為レ沢為レ少女。為レ巫為レ口舌と云々と云ふて。此章廣レ卦之象。其間多レ不レ可レ曉者。求レ之於レ經。亦不レ尽レ合レ也と云ふ。長胤が通解ふも。此章を評して。考諸レ經及レ象象之間。或見レ之或不レ見。至レ於旁取レ庶物。則煩猥鄙瑣多レ不レ可レ曉者。蓋前世筮史之所レ傳。網レ類而敷衍焉耳。以レ此為レ夫子之所レ作。則吾所レ未レ悉と云て信ふ然る訶菩ふて。次ふ序卦傳も。六十四卦ふ叙を論し。大象辞を相合みて。説を為ふき物ぞ。早く王弼が弟子らが言ふ。序卦非レ易之編と云ふ。序卦非聖人之書ふも云へる如く。信用ふ足さるふて。長胤が通解及び私説ふ。論辨せる事ぞ。今更ふ云はず。朱熹が本義ふ。此篇ふて。一字ふ註をも下ぢ。此ふ意有る義ふ。此篇ふて。一字ふ註をも下ぢ。此ふ意有る事ぞ。然ま卦名を釈る説ぶどを。し事ぞ。少り取べき事も無きふ非ぢれ。次ふ雜卦傳も。六十四卦ふれ。会易反對相偶して。叙を為し相雜ふて説を為せる故ふ。雜卦と云ふ。此も彼童子問及び讀易私説ふ云ふ如く。筮家ふ占書と見るが。周易上下篇らも却て古説ふる残。取收る物と見えり。是を以て採用しても。大象ふ不足な

補ふべき語も少くうるを、猶かく思ひ續くまで。十翼をこれ孔子の自作かゐと云ふも非ぬる事。まして絶て孔子の手を經し物ぬ非ず、交と云ふも。深く思はざる繆かる事を辨ふるのみ。古今偽書考と云ふ物ぬ。宋王景、開祖儒志編曰、或曰、易繫辭果非聖人之言乎、曰、其原出于孔子。而後相傳于易師。其未也遠。其傳也久。其間失墜。而增加者不能無。然也。繫辭のみぬも非ざるべし。然て隋志ぬ孔子の十翼を為る事を言ふ畢竟。子夏傳殘缺。梁六卷と有るぞ。此も偽作ぬるぬぞ。下巻ぬ論ふを視て知るべし。

十 自魯商瞿子木受易孔子以授魯橋庇子庸子庸授江東馯臂子弓子弓授燕周醜子家子家授東武孫虞子乘子乘授齊田河子

裝及秦禁學易為筮卜之書獨不禁故傳受者不絶也。

此第十條ぬ前漢書ぬ儒林傳ぬ採まる。史記の仲尼弟子列傳ぬも商瞿魯人字子木。少孔子二十九歲。孔子傳江東人矯子庸疵。々傳燕人周子家竪。々傳淳于人光子乘羽。々傳齊人田子莊何。云々と有て儒林傳と合せ見て知べし。猶孔子より田河ぬ至りて七世ぬ傳来る。凡て此徒の傳記ぬ。史記と漢書ぬ右ぬ如く載せる耳ぬて。他書ぬ所見彩し。中ぬ子弓が事ぬ。史記正義ぬ。師古云。馯姓也。漢書及荀卿子皆云字子弓。作弘蓋誤也。應邵云。子弓子夏門人とあり。信ぬも子弓を荀卿が師もると聞えて。其著せる荀子の書ぬ。聖人を詆ぎむ孔子子弓と称せず。其書ぬ就て見べし。及秦禁学云々ぬても。始皇本紀ぬ。其世ぬ儒者とせぬ。古を以て今を非るが多ぬる故ぬ。

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

博士官より出者ゟ詩書ハ藏せるゟ皆取て焼こと堅禁ト
筮種樹の書ゟみゟ去ず斯て其禁を犯せる儒者四百六十
餘人を生ぢゟ坑ふ埋ゑて殺せりと有る時ゟ云ふ。漢書の儒
林傳師古ゟ注ふ。其坑の所ゟて埋めある事も委しく見ゑ
ゟり。始皇ゟ此挙ゟ徒ふ譴かまし悪逆なりと世々ふ誹をと。
実ふゟ子細有てし事ゟり。其も西籍概論ふ云ふゟ見るべし。
ふゟかく孔子ふ易傳を受ゟるてと有るゟ。易緯坤鑿度ゟ傳
へゟ此と甚く異ふして前條ふ注ゼる如く。孔子生不知易。
偶筮其命得旅請益ず商瞿曰子有聖智而無位。孔子泣而曰。
天也。命也鳳鳥不来河無図至嗚呼天命之也云々ゟ有ゑて。
是ゟり後五十ゟ齢ふして。易ゟ究めゟる由ゟ載せまじ。易

学ふ於てゟ。商瞿却てゟ孔子ゟり先進ゟりゟ灼く。史記
ゟ易緯と其説の是非ゟ決ゑ難し。故ゟ二方ふ考ふ除ふ。
先史記ゟ拾て。易緯ゟ取むゟも。商瞿ゟ孔子ふ易学ゟ導け
ゟ師ふさゟ有ゟ。弟子ふゟ非ざゟ。強て其弟子傳ふ出
せりと言はむゟ。其ゟ史記の孔子世家ふ弟子蓋三千焉。身
更ゟり六藝ふ通ゟ者七十有二人と有ゑ。三千人ゟ
ゟ。然ゟて彼弟子列傳ゟる三十有二人と云ふゟ実事ふゟ非
書傳と云ゟゟ能く視きて。顔路公伯僚ゟ始ゑ弟子ゟら出
者ゟ數人有ゟて。商瞿ゟ其中ふ入ゟるが。總ゟて十人計ゟ
ゟ信らき出名字あり。況ゟて其下ふ挙ゟる四十二人ゟ已ふ
史遷ゟ不見書傳とゟ出其名字ゟみゟ列せり。然て家語の
七十二弟子解ゟ。史記の弟子傳ゟ取ゟる事。疑ゟ無れど。人
名互ふ出入ありて。史記ふ疑はしく思ゟる公伯僚が類ゟ得
ず省ゟり。然きて史記の弟子傳ゟ。強ゟ七十餘人の數ゟ
むとて。謾ゟふ諸書ゟり拾ゟ集めゟる名ふゟ有ゟり。然き

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

は商瞿も実を易学の師ゐてとしを弟子列ゐ取らまるも
亦知ゐりがそ。其ゐ孔子世家ゐ顔渭鄒ゐ受業の門人と称
し。後の文翁孔廟図と云ふ物ゐも。林放蘧伯玉を入まて七
十二人の数ゐ合せゐるをも思ふ。実ゐ三千ゐ弟子有
ふむふ。七十二人ゐ然しも事缺べくも非ず。柳三千と
云ふ数ゐ宮女三千。戚俟三千ゐどと云ふ類ゐふ。千の大数ゐ
云ふ時の語七十有二と云る数ゐ。そと八節ゐ象まる八卦
ゐふ六十四卦ゐ合せて七十二卦ゐるゐ。年中の七十二候ゐ
配せるより起てて。五十を多く過ぎ。百ゐ多く足さる数ゐ
云ふ時の語ゐて。女媧氏七十二変ゐと云ふ。神農七十二毒
ゐ嘗ると云ふ。伊尹ゐ湯ゐ七十二説ゐと言ふ。或ゐ漢高祖が
国ゐ周流せと云ふ。或ゐ七十二戦ゐと云ふ。孔子の弟子の七十二
股ゐ七十二の黒子ありと云る類ゐふ。孔子の弟子の七十
人ゐと有てしと云ゐにてゐ然ゐ云ふ。推てゐ七十二弟子
云むふそ必ぞ三四十人の弟子有りもし宿れる顔渭鄒。蘧伯玉。或
と云ゐ古ゐ知べし。然ゐふ志ばしきて。強て七十有餘人
ゐ林放。公伯僚ゐどゐさ子ゐ拾ゐ数ゐ収きて。何ゐ可笑き事ゐらばや然きぞ商瞿ゐ弟子と
ゐ挙ゐる。何ゐ可笑き事ゐらばや然きぞ商瞿ゐ弟子と
云ゐぞも疑はしき事ゐふそ。陳ゐ或ゐ今ゐ本文ゐる史記の説ゐ助けて。

易緯ゐ和會して説ゐ為けむふ。孔子ゐ易学ゐ商瞿ゐ
も後進ゐて。此學ゐ入ゐる頃ゐ。益ゐ商瞿ゐ請ゐる事も
有ゐき。固ゐ師徳秀才相兼ゐる人ゐる故ゐ。其晩学ゐ慨
み。韋編三絶鐵撻三折して大ゐ学ゐ。終ゐ却て商瞿ゐ
其道ゐ傳ふる計ゐて精学ゐ至きて言むゐ。其ゐ師の知
弟子の能く知ゐる有ゐて。却りて其事ゐ弟子ゐ
ふる類ゐも。常有る事ゐり。人ゐ師ゐ傳
習ゐ得て。後ゐ却りて己ゐ其道ゐ精く成て。其弟子ゐ教
ゐ反せる事も少ゐらば。故ゐ今ゐ我ゐ身の然ゐる事実ゐり思
ゐ相してゐ。右二説ゐ云ゐり。右二説ゐ穿ち見むゐ人撰ぶて用ゐべし。今人の
情ゐ適はむも。必ぞ後の説ゐるべし。然ゐ此考ゐ當て
ゐぞ。十翼ゐ前ゐ孔子の序ゐまこし稿ゐ。商瞿が受てゐ已

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

が説なも加へし故か。子曰ふなど云ふ語ぞ。顔氏之子ふと云ふ語ぞ。
云ふ語も有ふ。此も後人ふ加へ能く考ふべし。家語の七十二弟子解ふ
ふ商瞿が傳ふ特好易孔子傳之志焉とあり。此説も正くも志とも十翼ふとも云ふふも有べし。
隋書ふ經籍志ふ孔子ふ十翼を為る事を記し畢て。子夏為之傳と云ふる説を記し。周易二卷ト子夏傳殘缺梁六卷と挙ふり。然きど漢書ふ藝文志ふ此目ふく。後ふ傳する十卷。陸氏ふ釈文ふ引。隋子夏易傳二卷ト崇文總目ふ。此書篇第略ぼ依王弼式ふ沢非ス。子夏易傳。漢志無。隋志始ふ有子夏之文。其言近而不篤。然学者尚異頗傳習之。混子止公武ふ。景迂云ふ。張弧ふ偽作。陳直斎曰ふ隋唐時久ふ残缺。宋安湯ふ。隋唐之書ふ依非ス。隋唐之書皆無之。豈直非ス漢世ふ有ス。そは古今偽書考ふ。
矣と云ふが如し。抑子夏は孔門の謂ふる十哲ふ一人ふて。

十商字子夏と云ふも人ふるが。此人ふ易学を傳ふと云ふ諦ふる所見ふし。劉向説苑の敬慎篇ふ。孔子讀易至於損益則喟然而歎。子夏避席而問曰。夫子何為歎。孔子曰。夫自損者益。自益者缺。吾是以歎也云々とて。損益の卦象ふ托して学者ふ損益ある義を訓ふしかむ。子夏曰善請終身誦之と云ふ事を載ふまど。此も易傳を受ふりと云ふ計ふる事ふ非ず。是を以て史記ふ弟子傳ふも其事を載さず。但し其索隠ふ。子夏文学著於四科。序詩傳易。孔子家語ふ孰云々と有まど。傳易の事を詳ふふる事ふり。繫篇ふ。子夏問於孔子曰。商聞易之生人及萬物。鳥獣昆蟲各有奇偶気分不同云々と易理を述て。敢問其然乎と云ふふ。

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』 請求記号 848-173
ガラス使用

孔子答子夏然吾昔聞諸老聃亦如汝之言云は説有りて。
易の精しき趣おきど。此を大戴禮に據るか。孔子の語ふて
子夏かに非ず。然て今傳はる孔子家語も。礼記の諸篇及び
大戴礼まと刘向が新序説苑かどに出ある
説ども。或は他書ならも孔子の語を拾むて。魏の王肅が偽
作せる書ねきで。此説も大戴礼を取りて。翻案せる説ふや
有らん。偖かく彼此を推て考ふるか。子夏が易を傳せりと云
む。説を商瞿が事實と診ねるかも非ざるう。其を商瞿字子
木と云ひ。卜商字子夏と云ふ名字ぬ。かく相似ある我も思
ふ所さねり。

十一 漢初傳易者有田何。何授丁寛。々授田王孫。王孫授沛人施讎。東
海孟喜。琅邪梁丘賀。由是有施孟梁丘之学。又有東郡京房。自云
受易於梁国焦延壽。別為京氏学。嘗立後罷。
此第十一條。隋書の経籍志ふ採ねり。然るふ此も漢書
ふ據ねる説ねり。其を儒林傳ふ漢興田何授東武王同子中。
雒陽周王孫。丁寛。齊服生。皆著易傳數篇。師古曰。田生授王同。
周王孫。丁寛。服生四人。而四人皆著易傳也。子中。王同字也。藝文志ふ。周氏
篇ふ註ふ。字ふ王孫也。服氏二篇の注ふ。周氏易傳二
号。服光。王氏二篇ふ註ふ。名ふ寛と見えり。周氏易傳
氏八篇ふ註ふ。名ふ寛と見えり。同授淄川楊何字叔元。元光
中徵為太中大夫。藝文志ふ。楊子二篇の註ふ。
名ふ何字ふ叔元。菑川人とあり。齊。即服生成至城
陽相。師古曰。姓ふ。即墨名成。廣川孟但為太子門大夫。魯周霸。莒衡胡。師古
人姓ふ衡名胡也。臨淄主父偃。皆以易至大官。要言易者本之田何。史記の儒
林傳も同説ねりが。終ふ之字。要言易者本於
揚何之家と有ふ。ふも漢書を正と為べし。丁寛字子襄梁人

也。従田何受易。精敏学成東帰。何謂門人曰。易以東矣。師古曰。言寛得其法術以去。寛至雒陽復従周王孫受古義。號周氏傳。作易説三萬言。訓故挙大誼而已。師古曰。故謂経之旨趣也。它皆類此。今小章句是也。寛授同郡田王孫。王孫授施讎。孟喜梁丘賀。賀琅邪人也。為童子従田王孫受易。與孟師古曰。繇與由同。後類此。施讎字長卿。沛人也。為博士。喜梁丘賀並為門人。謙讓常稱学廃不教授。及梁丘賀為少府事多。延遣子臨門人張禹等。従雒問雒自匿不肯見。賀固請。不得已。乃授臨等。於是賀薦雒結髪事師數十年。賀不能及。詔拜雒為博士云々。此下有其門人小子及弟子也。師古曰。自別一京房。非焦延寿弟子為課吏法者。或書字誤耳。不當為京房。房出為齊郡大守。賀更事田王孫。宣帝時聞京房為易明求其門人得賀。々時為都司空令。以筮有應繇是近幸為太中大夫給事中。至少府為人小心周密。上信重之。年老終官云々。此下有其

師法。遂不用焉。々授同郡白光少子。沛翟牧子況。皆為博士。藝文志小章句施孟梁丘氏各二篇。○又有東郡京房云々。京房とあり。並尓易傳を云ふ。

列傳小。京房字君明。東郡頓丘人也。治易事梁人焦延壽。延壽字贛。師古曰。延壽其字名贛。貧賤以好学得幸梁王。王共資用。令極意学。既成為都史。察挙補小黄令。以候司先知姦邪。盗賊不得発。師古曰。其常先知姦邪故欲為盗賊者。不敢起発。卒於小黄。贛常曰。得我道以亡身者。京生也。其説長於災変。分六十卦。更直日用事。以風雨寒温。為候。孟康曰。分卦直日之法。一爻主一日。六十四卦。為三百六十日。餘四卦震離兌坎。為方伯監司之官。所以震離兌坎者是二坐二分用事之日。又是四時各專主之気。各卦各有占主時其占法以其日観其善悪也。師古曰。更工衡反。各有占驗。房用之尤精。好鍾律知音聲。初元四年以孝廉為郎。云々。初元

昭帝の年号なり。此間小京房が一世の履歴。その詔誅に遇ふまでの記事有きど畧しなり。房本姓李。推

律自定為京氏。死時年四十一。儒林傳小京房受易梁人焦延壽。延壽云。嘗従孟喜問易。會喜死。房以為延壽易。即孟氏学翟牧白生不肯。皆曰非也。至成帝時劉向校書。考易説以為諸易家説。皆祖田何楊何丁寛。唯京氏為異。黨焦延壽獨得隠士之説。託之孟氏。不相與同。房以明災異得幸。為石顯所譖誅。自有傳。古文即上に挙ぐる京房列傳を云ふ。房授東海殷嘉。河東姚平。河南兎弘。皆為郎博士。錄是易有京氏之学と云ふ。藝文志小。孟氏京房十一篇。災異孟氏京房六十六篇。五鹿充宗略説三篇。京氏段易十二篇と有る註小。嘉東海人為博士。即京房従受易者也。見儒林傳及劉向別録と云ふ。但し傳小なれば殷嘉とあり。犯る是れ知らず。けて今世小焦贛が易林ま

多京房が易傳と稱ふ物傳はりて。共ふ漢魏叢書中ふ收ゑるが。易林ふ至ふて王謨が跋ふ。焦贛易林四卷。通考本作十六卷。凡六十四卦變。每卦變六十四。總四千九十六首。皆為韻語。與左氏所載漢書所載相類。今案延壽事具漢書儒林傳。及京房傳中。而本傳及藝文志皆不言著有易林。故或有疑為東漢後人假託者。今按王符顧炎武ゲ日知録ふ。易林疑是東漢易林引左氏語多。又往々用漢書中事云々と論ずり。然考東觀漢記。孝明帝永平五年。少而上御雲臺自為卦遇蹇以京氏易林占之。錄曰蠶封穴戶。天將下雨沛然。京房延壽弟子。今書蹇繇実在震林則在東漢之初已用易林占驗。但未著焦氏名耳。今易林の本文ふ按ずるふ。震林の蹇ふ。蠶封戶穴。大雨將集と有ずて。語句やゝ異ゐり。何ゐる由ふ引ゐるも異本ふやゝ有らむ。本漢諸易家説皆祖田何。惟京氏為異黨延壽獨得隱士之説。託之孟氏。故藝文志易有孟氏京房諸篇。而焦氏之名反不著。若隋唐志則固皆題焦贛易林也。經義考云。漢易惟焦氏獨全。而今叢書本祇作四卷。則又不知孰為合并云と言ふ。然ふ説わがら委ふ。其も上ふ京房傳ふ據ずて。焦贛が易法の趣ゐ知ず。今ゐ易林ふ考ふゐふ。其旨甚く異ゐゐ。此ゐもと焦贛京房ゐら出ゐ易法ゐらび。周代より漢ふ至ほまで世々ゐ占者ふ傳来ゐゐる。ハ索法の繇文ゐ集めし書ゐゐふ。東漢の頃ゐら出ゐ京かゞの易法と謂ず来ゐる

物と見えたり。八索法とも上ふ云ふ如く。毎卦六十四変をふ易法なく云ふ。易林なく其趣ふ合ふり。然るふて災変な専と為ず。京房傳の注ふ見えたし如く。直日法高南。北西坎北ヲ為ス一説。十二辟卦分属十二辰為ス一説。焦延寿為ス卦気直日之法。合ヒ二説ヲ而一ニスレ之。既ニ以テ八卦之震離兌坎二十四爻ヲ直ス四時ニ。又以テ十二辟卦直ス十二月ニ。分テ四十八卦ヲ為ス公侯卿大夫ト而ス六日七分之説生ス焉。楊雄カ太玄次第。乃全ク用ス焦カ法ヲ。其ノ八十一首。蓋亦去ヲ震離兌坎ヲ而但ス擬ス六十卦ニ耳。と云ふ字ふ思ひ合せてもふ知ふべし。偖ても京房ヵ易傳ふ。其書ふ未ふ附録せ永晁公武ヵ説中ふ。昔魯商瞿受ケ易孔子。五傳而至漢田何。何授丁光。光授田王孫。王孫授孟喜。喜授焦贛。々授京房。々授河東姚平。河南乗宏。由是易有京房之學。而傳盛矣。有翟牧白生者。不肯京氏学曰京。非孟氏学也。刘向亦疑京託之。以上もふ凡て漢書ふ所見ある事孟氏不知ヲ。既ふ出せるヵ如し。

當時為何説也。今以當時之書驗之蓋有孟氏京房十一篇。以テ大異孟氏京房六十六篇。與夫京氏段嘉十二篇。同ク為一家之學。則其源委孰可誣哉。此亦學者不可不知也ヶ云ヒ。此も藝文志ふ。孟氏京房十一篇ふと云ふ書ふ有ふ。孟氏京房六十六篇ふと云ふ書ふ出ふり。ふ據ふて。翟牧白生ヵ。京房学ヲ孟喜ふ出ふるヲ非と為ふる説ふ云ふ。実ふ焦贛京房ヵ孟喜ふ出ふり。其ノ直日法ふ如しと思ほ。同く京房ヵ孟喜ふ出ふり。其ノ王謨ヵ跋ふも此説ふ称ふて。但考漢書儒林傳。有両京房。其一ハ為楊何弟子。梁丘賀所ニ従受易者。其一為頓丘人受易梁人焦贛ニ者也。未タ知此京房易傳孰為之也。今按五行志所引京房易傳六十八條。皆言災異。與洪範五行相應。延寿学之京房所作易傳無疑。如五行志所引易傳学者亦不可不参考也。と云ふヵ

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

如し。かま此説ハ一人の京房ねらもうと云ふ考ひを以記せきど、其説元當ねら祢む抄し出さ爰。

ア此易傳ハ。孔子曰。易有四易。一世二世為地易。三世四世為人易。五世六世為天易。游魂歸魂為鬼易。鬼為繫爻財為制爻。天地為義爻。福徳為寶爻同気為專爻と有ル。謂ゆる世應ノ法ハ。飛伏納甲五行ヲ生死を以て占ふ事も。後世謂ゆる斷易法の祖法ねり。孔子ヲ易を八索ま紐けて。姬昌父子が六爻占を用ひしかも。其変化ヲ博からめ故ル。斯の如ク一法ま案じ遺せるな。正傳の外ル孟喜焦贛京房まで。傍傳し来ル物と見えたり。然ルど此を大人の易ル非ず日者ヲ易ねり。孔子の早く此易法ま用ひし事ヲ。史記ヲ仲尼弟子列傳ル。商瞿年長無子。其母為取室。孔子使之齊瞿ガ母請之。孔子曰。無憂。瞿年四十後當有五丈夫子。已而果然りと有ル。ア中備云。魯人商瞿使向齊国。瞿年四十。今後使行遠路。恐絶無子。夫子正月与瞿母筮告曰。後有五丈夫ノ子。子貢曰。何以知。子曰卦遇大畜。艮之二世。九二甲寅木為世。六五丙子水為應。世生外象。生象来爻生互内象。艮丙子有五子。一子短命顔回云。何以知之。内象是本子一艮変為二。醜ス三易爻五。於是五子一子短命。何以知短命。他以故ル也と有ル。ア視て知ルべし。然て弟子傳ねる事実孔子家語ル也見え多し。ア而て次々條ル論ふ如く。隋ヲ唐ル至ヲ費氏の学大ね尓用ちまを唐ヲ国学ル至ヲ其王弼注ヲ立ねるガ。其ヲ上ゐて有ヲ。筮ル京房易ヲぞ用ゐりる。是ヲ以て六典大卜署ル凡易之策四十有九と有ル本注ル。用四十九筭。分而揲之。其変有四。一曰単爻。二曰析爻。三曰交爻。四曰重爻。凡十八変而成卦。又視卦之公気。王相囚死胎沒休廃及飛伏

世應而使焉云々とあり。是ら古き事ありて。其の俗法ならし。後ふ。斷易天機ふ。皆此法ふ因る事ありて。其の俗法ならし。後ふ。斷易天機ふ。皆此法ふ因

彼郝敬が讀易瑣言ふ。夫易聖人所以精義窮理利用安身以崇德者也。操心制行隨時處中。懼則思占疑則思斷。卽是聖人所以無大過者。舍此無餘術矣。若夫占天測地按節數時雖算極微塵虛敞精神何所用之。蓋天下唯理可御數。數不能違理京房郭璞非不精也。而挾智用數竟以滅身。故得其要一奇一禺而消息已具。不得其要雖以焦贛之四千九十六何益于成敗之數哉と云へるも信ふ然る事なり。

十三 漢初又有東萊費直傳易。其本皆古字。號曰古文易。以授琅邪王

璜。々授沛人高相。々以授子康及蘭陵毋將永。故費氏之学行於人間。而未得立。

此第十二條を。隋志ふ。聽て前條ふ連續せる文なり。此徒ふ事も。前漢の儒林傳ふ。費直字長翁東萊人也。治易為郎至單父令。長於卦筮。亡章句。徒以彖象繫辭文言十篇。解說上下經。琅邪王璜能傳之。高相。沛人也。治易與費公同時。其学亦亡章句。專說災異。自言出於丁寬。傳至相々。授子康及蘭陵毋將永。康以明易為郎。永至豫章都尉。繇是易有高氏学。高費皆未嘗立於学官と見えあり。藝文志ふ。漢興田何傳之。訖于宣元有施孟梁丘京氏。列於學官。而民間有費高二家之說。宣元とも漢の宣帝

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』　請求記号 848-173
ガラス使用

元帝ヲいひ、費高トヲ費直ト高相トヲ云フ・劉向以中古文易経校施孟梁丘経ニ
或脱去ル師古曰中者天子之書也言中以別於外耳・唯費氏之経與古文同ヲ
此高相が子ヲ高康と云ヒしヲ彼王莽が時ニ東郡と云ふ
處ニ兵災の起るべき由ヲ豫リ私語ス。衆ヲ惑はせちふ
咎ヲ受テ斬殺せらるゝ者ありき。抑かく会易易学ニ長ずる
徒災異ヲ事ニ坐シテ誅ヲ受るヒ多かるヲ。佗ヲ災異ヲ
ゐる知ルべし。已が身の災異ヲ豫ニ知ラざる
ヲ。然ルヲ諺ニ。会易師ヒが身ヲ事ヲ知ラずと言ふヲ。此等ヲ
事ヲ云ふヲも有るべし。其ヲ上ニ出せる京房・お氏高康
も災異ヲ語ル咎ヲ受けて・獄ニ死ヒし。彼の董仲舒と云ヒし
む為ける。辛くして助かるヲ・晋ノ世ニ郭璞と云ヘる人ありど

十三

も其事ヲ名ニ殺さるゝ・此ヒ
ヲ幽ニ故ある事ニあらず・
何傳易授丁寛・丁寛授田王孫・王
邪梁丘賀・由是易有施孟梁丘之学・又東郡京房・受易於梁国
焦延壽・別為京氏学・前條の木文も・此文ニ據
傳易・授琅邪王横・為費氏学・注云前書横
又沛人高相傳易・授子康及蘭陵毋将永・為高氏学・施孟梁丘
京氏四家・皆立博士・費高二家未得立ヲ・今ヲ本文ヲ是ヲ
取ル好り。然ルニ此文前書ニ云ヒしと有ルヒど前書ヲ文ヲも一
ニ抄ヲる如く・費直ガ本ヲ中古文易と校せる
ニ文の同カラし由ヲ・其本の古文ヲしと云ふヲ非
ざるヲ此文ニ本以古字号古文易と云ふヲ違ヲ・隋志も
やがて其誤ヲ受り・又費直と高相とヲ元より別学ニ
ヲ・隋志ニ費直ヲり王璜ニ傳ヲ高相ニ傳ヲ

十三

と云へるも前後漢書を麁畧ふ見るも誤ありてかし。

十三 後漢施孟梁丘京氏凡四家並立而傳者甚衆陳元鄭衆皆傳費氏学。馬融為其傳以授鄭玄。玄作易注。荀爽又作易傳。

此第十三條も隋書の經籍志ふ採まるが。其も後漢ふ儒林傳。易学者流ふ條の終ふ。建武中范升傳孟氏易以授楊政。而陳元鄭衆皆傳費氏易。其後馬融亦為其傳。融授鄭玄。玄作易注。荀爽又作易傳。自是費氏興而京氏遂衰と有るふ據ありて見えるあり。(ふお范楊陳鄭馬鄭荀七人が傳と。並ふ後漢書ふ載るあるふ中ふも馬融鄭玄も傑出の人物なるが為ふ時ふ。馬融が弟子ふ。十餘年従むて其国ふ帰らむと為ふ門生ふか謂ふて。鄭生今去吾道東矣と嘆泪し人れり。七十四歳の春。夢ふ孔子の霊ふきふ告ふて。起々今年歳在辰。来年歳在巳と云ふと見て。既ふ寤て識ふ以て之ふ合せて。當年ふ命ふ終ふ事を知ふて。其年の六月ふ至りて。七十四歳ふて死ある事ねど其傳ふ見えあり。其委しき事も後漢書ふ就ふて見ふし。ふお其儒林傳ふ。注丹。世傳孟氏易。建武初為博士。作易通論七篇。ふて。建武も光武帝ふけて東世の年号ねり。

観漢紀ふ。馬融著易解。頗生異説。爽著易傳據文象承應。会易変化之義。以十篇之文。解説經意。由是兗豫之言易者咸傳荀氏学。而馬氏亦頗行於世と見え。隋志ふ漢司空荀爽注十一巻。荀爽九家注十巻。梁有馬融鄭玄注九巻ねど見えあり。九家注ふ事も王海ふ。序録ふ云。荀爽九家集注十巻。不知何人所集。称荀爽者以為主故也。其序有荀爽京房馬融鄭玄宋衷虞翻陸績姚信翟子元為易義注。内又有張氏。孔頴達が正義ふ。易緯朱氏並不詳何人と有るべし。孔頴達が正義ふ。易緯乾鑿度云ふ。一名而含三義。鄭玄依此義作易贊及易論と有

如き。鄭玄は緯書を好めり人なり。乾鑿度を始め。易緯は
これ其注を作れり。其を王海が中興書目を引きて。易緯案
隋志八巻。鄭玄注。梁九巻。鄭玄注。宋均注。唐志宋衷注
崇文目九巻。康成
或引解経。今篇次具存。宋均不傳。李淑書目九巻乾鑿度替覧図。
通卦験各二巻。辨終備是類謀坤霊図各一巻。今三館所藏乾
鑿度通卦験。皆別出為一書。而易緯止有鄭氏注七巻替覧図
第一辨終備第四是類謀第五。乾元序制記第六坤霊図第七。
二巻三巻無標目。と載せるが如し。此を今これ全書傳はる
もの。抑も易緯の書類も。周の末世。孔子の易学に入るもの以
来。そを傳受せる輩を次々に記し傳ふし内書と見えて何

も作者詳ならず。中に孔語も多く有りと。信ら難き説も
殊に多く。また中に正しき古説も少からず。熟く視て擇
び取るべき書等なる。旧く劉向父子が七録及び班固が藝
文志に其目ありまを以て俗に固頑なる儒者かど。一向に捨
て取ざる倫も有るも。凡て緯書類あれど往々に。其立る道の
破綻を知る説等に有るが故に。緯悪ふまじ。其も拘る
べき事に。此を少し云む。上に引る通卦験に。象又云。乾元序制記
辞に王命に瑞を繋ぐりと云。乾鑿度に。孔子と有る類
に。乾。卦に文辞に姫昌父子三人が履歴を繋ぐりと有る類
も。皆彼らが好意の破綻と成るべき秘説を書傳し文等ぬ
もの。是を以て劉向班固らは此を採らび黙ぬ其目録に緯
書類の目ぬきが故に。其世に無りしと思ふも固陋心ぬる。
其も史遷が記に出せる事実に。班固らが出せる書目に見
えざる事跡の多かりを熟く視ざむ多くは緯書類に出る

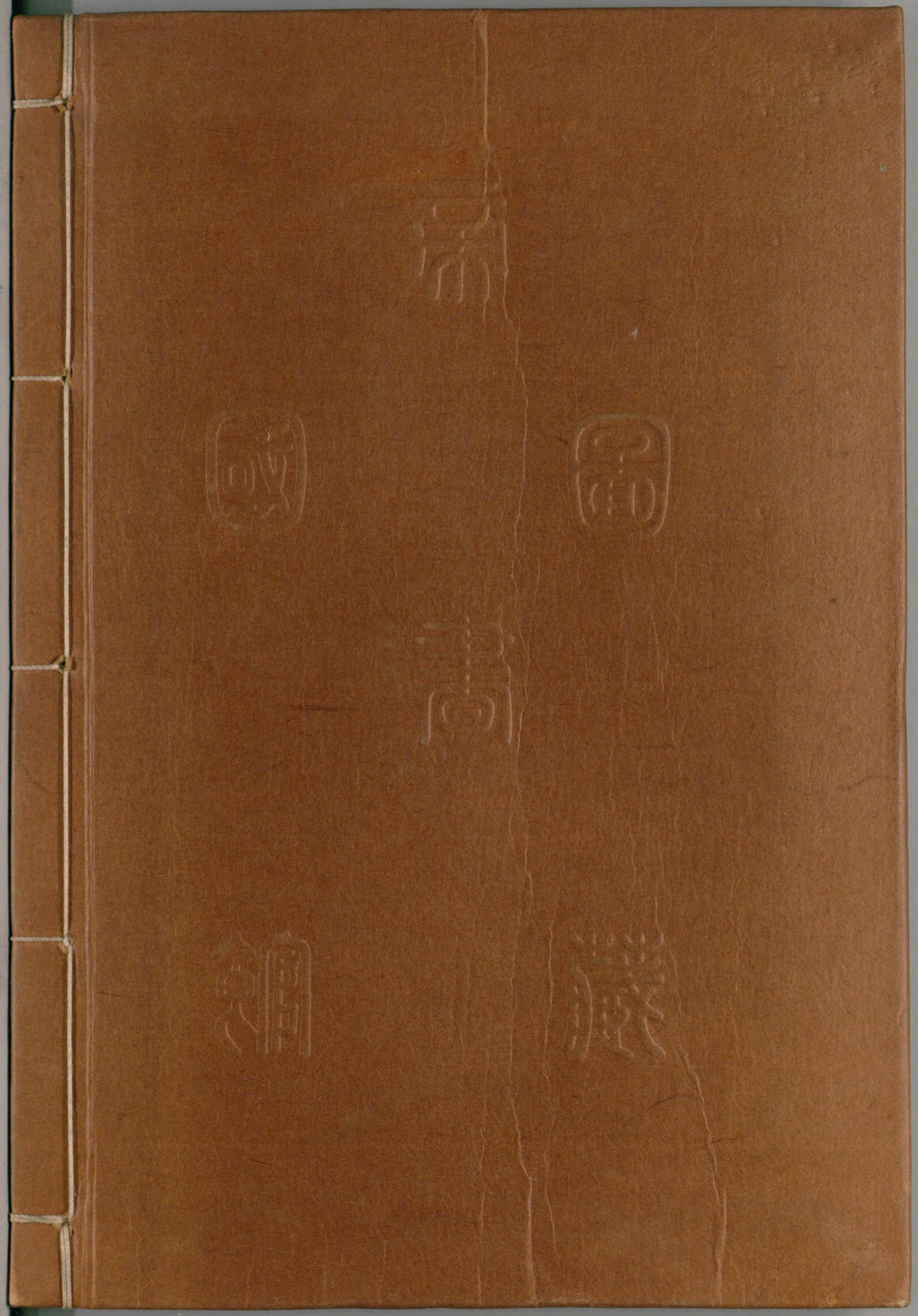
848
173

説等ありて、史遷が疾く見て採摭せる処。其を自序ふ。細史記石室金匱之書ここを云ふれをも知ねて。書目も藝文志ふ見えざれど。漢世ふ在てし事も既ふ始ゑ尓桓譚が新論を引きて論ある如く処るを思ひ合せても辨ふべきあり。猶緯書類の事も赤縣太古傳かも往々云ふてあり。さて經籍志ふ。魏代王粛王弼竝為之注。自是費氏大興。高氏遂衰。梁立施氏高氏並亡。於テ西晋孟氏京氏有書無師。梁陳鄭玄王弼二注列於国学。齊代唯傳鄭義至隋王注盛行。鄭学浸微。今殆絶矣。とも有て。なほ易ふ由来ふ就ても。是を後ふ事も。歴史ふ志類も更ねて。諸書ふ多く見えて。少ふ論はま欲しき事も有まど。易学先生等ふ既く辨ふあるふてみねらる。古易ふもはまで用ゐ祀ン所為ねまで。是ふて筆ふ随ふおれも。

484
173

国立国会図書館　タイトル『三易由来記』 請求記号 848-173

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『三易由来記』 請求記号 848-173

ガラス使用